



解説書

えさし郷土文化館

2022年7月16日(土)～8月7日(日)

奥州市埋蔵文化財調査センター

2022年8月13日(土)～8月28日(日)

奥州市役所衣川総合支所

2022年9月7日(水)～9月28日(水)

胆沢郷土資料館

2022年10月1日(土)～11月13日(日)

奥州市牛の博物館

2022年11月19日(土)～12月11日(日)

ごあいさつ

奥州市には、国指定史跡を始めとする 1000 を超える多数の遺跡が存在しています。これらの遺跡や出土した遺物は地域の歩みを示す貴重な財産であり、こうした資料を活用し郷土の歴史文化を広く周知することを目的にえさし郷土文化館、奥州市埋蔵文化財調査センター、胆沢郷土資料館の協力をいただき巡回展を開催しています。

今回の展示では、市内遺跡の発掘調査で出土した考古資料を中心に、主に江戸時代の史資料を公開いたします。これらの時代は「近世」とも呼ばれていますが、奥州市を含む岩手県南部では仙台藩による支配秩序が確立し、今日に至る地域性が形成された時代でもあります。

本展では、この時代を示す「要害」や「屋敷」を中心に、最新の知見を交えながら奥州市をはじめ胆江地方に生きた人々の諸相について明らかにしていきたいと思います。

ぜひ、多くの市民の皆様に地域の歴史に触れていただければ幸いです。

令和4年7月

奥州市教育委員会

教育長 高橋 勝

凡例

- 1 本書は、令和4年7月16日(土)～12月11日(日)まで、奥州市内の5施設において開催する巡回展「発掘された奥州市展 2022 近世の面影―仙台藩北辺の要害と屋敷―」の解説書である。
- 2 本書での資料掲載順は、展示順序と一致するものではない。
- 3 本書の執筆は遠藤栄一（奥州市埋蔵文化財調査センター）、高橋和孝（奥州市教育委員会歴史遺産課）、野坂晃平（えさし郷土文化館）が本論とコラムを担当し、「最新の発掘調査成果」を及川真紀（奥州市教育委員会）、中島康佑（同教委）が担当。「中林下遺跡」「明神下遺跡」は、北田勲氏（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）と須原拓氏（同センター）にそれぞれ寄稿頂いた。
- 4 本書はえさし郷土文化館が作成し、奥州市教育委員会、奥州市牛の博物館、一般財団法人奥州市文化振興財団奥州市埋蔵文化財調査センターが編集した。

I 仙台藩の成立と制度

1 奥羽再仕置と胆江地方

天正 19 年（1591）、東北地方各地で蜂起した一揆を鎮定した豊臣政権は、改めて東北地方の仕置を行います（奥羽再仕置）。この仕置の結果、胆沢・江刺両郡を含む葛西・大崎旧領は、出羽国米沢から転封となった伊達政宗に与えられることとなります。

この再仕置で注目したいのは、豊臣政権が東北地方で行おうとした「城破」（各地に点在する中世城館の破壊）が徹底できなかったことです。豊臣政権は当初一揆が蜂起することを想定しておらず、平穏に事態が推移すると考えていました。しかしながら、豊臣政権の仕置は東北各地に反発を呼び、一揆が蜂起する結果を招きます。この事態に直面して、豊臣政権は全ての城を破壊することを諦め、領内にいくつかの支配拠点を残すことを認めます。

胆江地方においては、葛西・大崎旧領を与えられた伊達政宗が支配拠点となる城の選定を命じられます。その具体的な経過については不明ですが、江刺郡であれば岩谷堂城、胆沢郡であれば水沢城の残置が決定しています。岩谷堂城には豊臣家臣の大谷吉継よしつぐが入り、普請を行います。水沢城についても、同時期に普請が行われたと推定されます。



岩出山入封後の伊達氏の家臣配置

2 石高と貫高

中近世移行期の戦国大名領内では、土地から得られる年貢などの収穫単位を一律に設定し、軍事動員などの統一基準にしようとする政策が行われます。代表的なものが「貫高制」と「石高制」です。この制度については研究が重ねられており、多くの議論があるところですが、大雑把に言うと、「貫高制」は土地の広さを基準に土地の価値を「貫」(＝貨幣)で表記した制度、「石高制」は土地の実際の収穫高を「石」(＝米の量)で表記した制度となります。

戦国期の葛西領内において、土地に関する制度がどのようなものだったのか不明ですが、奥羽仕置では、いわゆる「太閤検地」による土地の調査が行われ、所領となる土地の単位を「石高」で表記しようとしていました。奥羽再仕置後についても、伊達領の一部地域では石高で土地を表記している例があります。

しかしながら、江刺郡においては、文禄年間に行われた検地において貫高の表記が復活しています。この時の検地がどのようなものであったか、台帳のみしか残っておらず明らかではありませんが、「出目高」(元々の検地台帳よりも実際の土地の価値が高い)の台帳ですので、再検地が行われたものとみられます。このような貫高表記は、幕藩体制になっても残存し、公的には石高表記が使用され、藩内では貫高表記を使用するという、二重の表記が併存することとなります。

3 地方知行制

伊達家(仙台藩)には、奥羽仕置で改易された、中世に伊達家と血縁関係にあった大名・国人が多く身を寄せます。そのため、転封により所領が減った伊達家では、彼ら全てに禄(給料)を与えて城下に集住させる、という近世的なシステムの構築が進みませんでした。

そこで、伊達家では新たに家臣となった武士達を各地の所領に居住させることにより、土地の開発を進める方針を取ります。これがいわゆる「地方知行制」と呼ばれる仙台藩の制度です。この制度の下、留守家(後の水沢伊達家)や岩城家(後の岩谷堂伊達家)といった旧大名・国人階層の人々が旧臣(仙台藩からすれば陪臣)ごと各地に移り住み、土地の開発を進めていきます。このような、開発を急いで進めなければならない、また、中世以来の君臣関係が残存していたというところに、近世的な「石高制」ではなく、それまでの事務基準であった「貫高制」が復活した理由がありそうです。

また、仙台藩士は、地域の支配の拠点として所領に「屋敷」を構えます。しかしながら、この屋敷は単なる邸宅ではなく、奥羽再仕置で残された中世の城館を転用したいわば「城」であり、江戸時代の一国一城制に反する存在でもありました。そこで、幕府と仙台藩の間でこれらの「城」の取扱いが協議され、貞享元年に仙台藩内に点在する城を「要害」と称して幕府公認にする「要害制」が始まります。

II 仙台藩の拠点と町場

仙台藩では幕府の一国一城令のもと、正式に認められた「城」のほか、実質的に城および城下町としての機能をもった「要害」、各地域の支配拠点となった「所」「在所」が存在し、これらに領主として仙台藩の家臣団が配置されました。

各拠点については「伊達四十八館」と呼称されたりもしますが、三春藩の田村氏にも「田村四十八館」、出羽国の最上氏にも「最上四十八館」の呼称があることから、これらは実数よりも地口的な名称であり、仙台藩の場合は城・要害・所・在所を合わせると実際の数は70カ所を超えています。

仙台藩士の収入源には2種類あり、一つは給与としてコメや現金を支給される「蔵米取制」、もう一つが領地を与えられ、そこを家臣や農民に開発させた上で年貢徴収する「地方知行制」です。つまり、仙台藩士はそれぞれが伊達家の家臣であると同時に後者には地方領主としての立場もありました。

特に伊達家の親類にあたる上級家臣たちは交代で所領地と仙台北下の屋敷に駐在しました。これは一種の藩内参勤交代で、仙台に出仕することを「参府」または「上府」といい、仙台に滞在することを「定仙」と称しました。これは仙台藩が幕府的な制度を敷いていた証左といえます。

なお、拝領した城塞の規模は家格には関係がなく、白石城を拝領した片倉氏は「一家」の末席であり、一方で「一門」である宮床伊達家が「所」を拝領していました。ただし、1万石以上の要害はすべて一門に与えられています。

また、一国一城の原則のもと、仙台藩が幕府から正式に所有を認められた城は、本城である仙台北のみですが、例外的に白石城の存続が認められ、寛永5～13年(1628～36)に伊達政宗が晩年を過ごした若林城(幕府には屋敷として届け出ている)も内実的な隠居城(政宗は生涯隠居しなかった)として認識されていました。

このように、東北地方では石高以上に広大な領地を統治した大名が多く、一国一城の原則は現実的ではなかったこともあり、本城以外の城を認められた例は仙台藩以外でも秋田藩の横手城と大館城や盛岡藩の花巻城などが該当します。ただし、万治3年(1660)に仙台藩の内分知大名として立藩した一関藩の藩庁は城ではなく「陣屋」と称されていました。



『奥片岡風土記』に描かれた岩谷堂の街並み

1 要害（ようがい）

徳川幕府の一国一城令後も残った実質的には城と遜色のない規模の城塞。中世城館を前身としている例が多く、城の縄張り（なわばり）が仙台城よりも古いものも存在します。居館を中心に曲輪（くるわ）を配して大手門・土塁・石垣・堀を構えて比較的大きな城下町を形成し、仙台藩の統治拠点となったことから、「伊達二十一要害」とも称されています。所在地は藩領域北端の盛岡藩境、旧大崎領、南端の相馬藩境や仙道筋に多く分布しているのが特徴。中でも水沢、岩出山、登米、涌谷、角田、亘理はそれぞれの知行高が1万石を越える大身武士でした。

（1）岩谷堂要害

江刺郡片岡村に所在する北上山地の西端部、通称「館山」の頂部に立地。北を除く三方は急傾斜で、東から南東辺（ひとかべ）は人首川に臨む急崖（きゅうがい）となっています。中世は江刺郡主であった江刺氏の居城で、天正19年（1591）の豊臣秀吉による奥羽再仕置後に伊達政宗領となったのち、家臣（こおり）の桑折政長が配置され、次いで親類の景頼が着任。桑折氏は人首川に桑折堰（こおりぜき）を設け領内の農地灌漑を整備したとされています。桑折氏に次いで古田氏、増田氏、藤田氏が着任しますが、元和8年（1622）からは伊達忠宗の御部屋領として寛永20年（1643）までは城代が置かれたのち、万治2年（1658）に忠宗の七男の宗規（むねのり）が拝領。以後は岩谷堂伊達家が幕末まで在館しました。

要害の構造は東西に広がる尾根上に展開した山城（しゅかく）を利用し、本丸とされる主郭部分には土塁と空堀が現存しています。本丸西側には堀切を挟んで二つの腰曲輪（こしぐるわ）が設置されており、二の丸には岩谷堂伊達家が居館を構え、要害の中樞を形成していました。北西隅の大手門には外柵形虎口（そとますがたこぐち）と幅1間の水堀が隣接し、表門の中には土塁で囲まれた馬出しを築き、2カ所の門を経て二の丸の平場となります。岩谷堂伊達家の屋敷地であった二の丸の北東隅には堀切へと通じる搦手口（ほりきり）の裏門（からめでぐち）があり、門の左右に向かって柴垣（しばがき）が巡っていました。

岩谷堂伊達家の家臣の規模は侍屋敷105軒、家中寺3軒、足軽屋敷24軒で、別に仙台藩直属（きつしゅ）の給主11家、足軽102人を預けられていました。給主は伊達政宗に奉公を許され、近在の村内に知行地を持ちながら、藩境の番所役人、岩谷堂町奉行、新川（人首川）普請奉行などを務めました。預足軽は宝永元年（1704）には137人で、片岡村内に970石余の知行地がありました。

岩谷堂要害を中心に町場が形成されており、安永3年（1774）の『風土記書上』によれば、本町と称する町人町は9町。預足軽町は8町が設けられており、預足軽町は増沢村分も含め本町の外周に配置されていました。本丸・二の丸周辺の桜小路・中曾根小路（なかそねだるま）・達磨小路（だるま）・本六日町・北小路・うとう坂小路・服部小路（はっとり）・新小路・南新小路には家中屋敷（給主屋敷含む）が配置されており、町人町の銭鑄町（ぜにい）は東側に家中と職人が住み、西側が町屋となっていました。

町割は西から一日市町（ひといち）・中町・川原町の通りを南北に走らせ、各町の北端を8つの横町で結んでいました。川原町は人首川土手に接して問屋が多く、同町北側の川沿いに馬場が設置されていました。一日市町には仙台藩の馬市が設けられたことから馬喰（ばくろ）が多く、同町と六日町・川原町に藩の雑穀蔵（かいまい）・買米蔵も置かれていました。川原町横町の西端に代官所、東端に制札場（せいさつば）があり、江刺郡の中心市街地として商人や諸種の職人が居住していました。

(2) 水沢要害

水沢段丘上に位置する現在の水沢市街地を縄張りし、水沢伊達家の居屋敷を中心に家中屋敷地や町人町6町によって要害の地が構成されていました。当初は伊達政宗の命により白石宗実が代官として派遣され、要害の改修や藩境警備にあたったとされますが、慶長12年(1607)に柴田宗朝、元和2年に(1616)に石母田宗頼が相次いで入封し、寛永6年(1629)に金ヶ崎要害から伊達宗利が転封すると、以後は水沢伊達家歴代が16,000石余の知行高で封を継いで幕末に至りました。

水沢伊達家時代の要害の規模は絵図面や文献によって異なりますが、貞享5年(1688)の『水沢要害屋敷惣絵図』によれば、本丸、二の丸、三の丸、南の丸が記され、南の丸は御門外とあります。本丸は北西に位置し、二の丸とともに最も高燥の区画で、宝蔵・薬焼場(楽焼場)・馬場があり鎮守の若生稲荷社が祀られ、二の丸は要害の中心をなして多くの建物がありました。水沢伊達家当主の御座間をはじめ、書院・大広間・家老詰所・勘定所、大番頭・目付・物書・小姓の間などの室があり、池の傍らの二階からは屋敷地全体が見下ろせる構造。三の丸は要害の入口で、表門(大手門)・太鼓櫓・門番所・硝石蔵・兵具蔵・備荒蔵・葺屋・厩・馬場・練兵場・学館の立生館などがありました。

要害周辺には堀と土塁が築かれ、本丸・二の丸・三の丸・南の丸はそれぞれが独立した区画。土塁は本丸が最も高く、次いで二の丸・三の丸の順に低くなり、堀は浅いところで1間半、深い所では2間以上、三の丸には当初堀はありませんでした。このことから、本丸と二の丸が初期の要害の規模で漸次、南の丸・三の丸へと拡張したのではないかと考えられています。

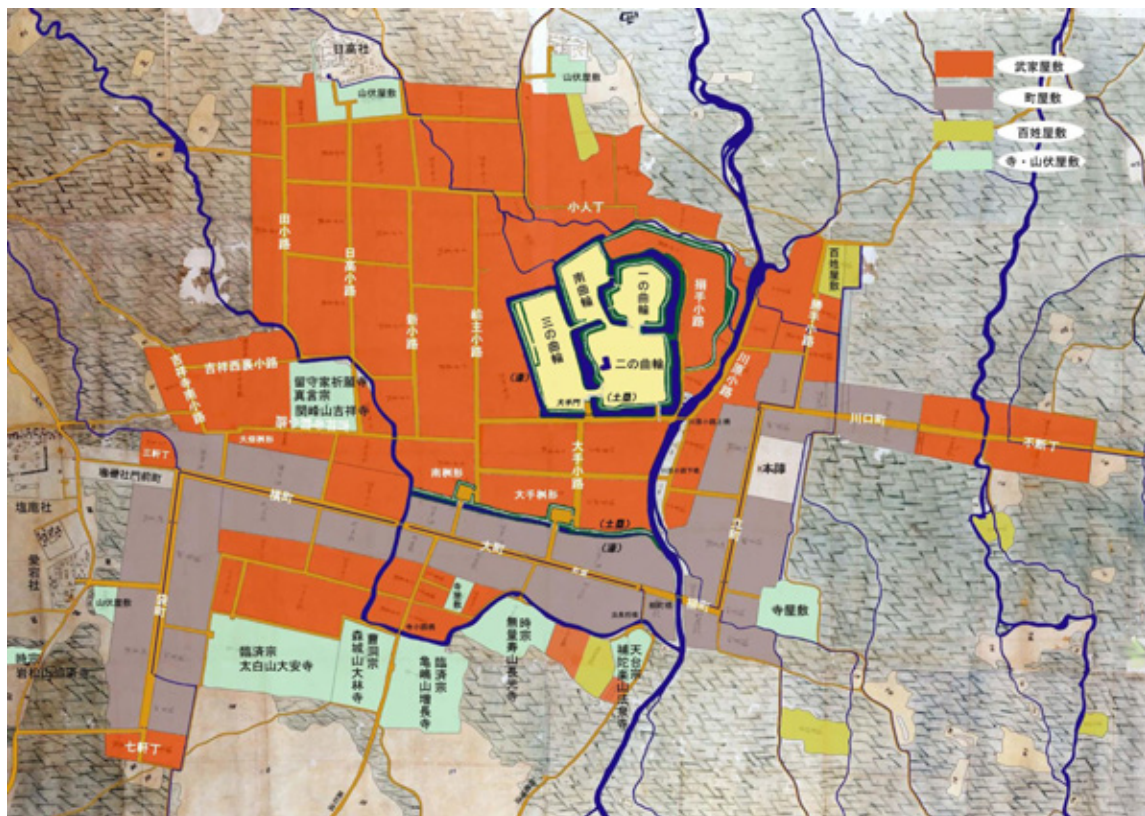
堀の水源は南西の乙女川から取入れ、日高神社裏を流れ、給主小路(吉小路)北端から二分して堀の上下へと引水。余水は北東の埋門付近の水門から乙女川に落としていました。なお、この乙女川は「御留川」の意で、堀には非常用の小舟が浮かべてあり、藩政時代は町民が同川を利用することが禁じられていました。

家臣の配置は、大手門付近の大手小路に水沢伊達家の親類、周辺の給主小路(吉小路)・川原小路・搦手小路には着座・召出・医師などの重臣、新小路・日高小路・大畑小路・田小路には平士を配置。北方の不断丁には不断組、勝手小路には台所衆、小入丁には小人組を置き、川口町・柳町・寺小路などの一部には平士を置いて仙台藩の士民雑居の様相が取り入れられていました。

奥州街道の南方口の七軒小路、仙北街道口の三軒小路には警備の組士を配置。大町川沿いには家中寺を置いて防衛の拠点としたともいわれています。特に藩境地帯の六原には足軽組を置いて三十人町を形成し、仙北街道近くの小山村・若柳村には大番士、胆沢川べりの佐野村に不断組、塩竈村内の福原には切支丹類族足軽を配置しました。

安永7年(1778)の水沢伊達家の総家中屋敷は812軒で、その内訳は侍屋敷506軒、足軽小人屋敷303軒、社地分2軒があり、天保9年(1838)の『幕府巡見使控書』には水沢の侍分として家中人頭600人、人数3,361人が記録されています。

町人町は要害の東側の奥州街道沿いに連なっており、横町・大町を基底とし、袋町・柳町・立町に発展して要害を中心に抱え、城内20丁余の家中屋敷を取り囲み最北の川口町まで伸長。南には七軒小路、北には不断丁を置いて奥州街道の南北出入口を制しています。



貞享 5/ 元禄元年 (1688) 水沢城下 (『貞享 5 年胆沢郡水沢要害屋敷惣絵図』加工)



『上伊澤元禄絵図』
奥州市教育委員会

(3) 金ヶ崎要害

北上川を眼下に見下ろす段丘上に築かれた仙台藩が設定した要害の一つ。

『西根村風土記』によると、かつてこの地は白糸館しらいとだてだったとされ、本丸・二の丸・蔵館くらだて・東館・
観音館かんのんだてから縄張りくわわが構成され、各曲輪からぼりを空濠くわう(溝)で画して北西部は自然地形の崖を利用
していたとされます。

胆沢郡が伊達政宗の支配地となると、当初は重臣の白石宗実が管理したとされ、次いで
桑折景頼が岩谷堂から転入して慶長7年(1602)まで在住。元和元年(1615)には磐井郡
黄海の伊達宗利が転封し、宗利が寛永6年(1629)に水沢要害へ転居した後に大町定頼が
拝領して歴代しゅうほうが襲封しました。家格は一族、知行高は3,000石、拝領の侍屋敷は109軒、
寺屋敷2軒、足軽屋敷64軒があり、知行地は西根村のほか、六日入村、上麻生村、磐井
郡松川村、同郡中川村などにありました。

町場は北上川右岸の奥州街道に沿って展開されており、盛岡藩領に最も近い同街道筋の
宿場町として発展。町人町は本町のみで家数は67軒とあり、大町氏の家中小路と足軽屋敷、
拝領の神社や山林は村扱いからは除外されていました。



金ヶ崎要害見取図(『金ヶ崎町史1』 2006)

(4) 上口内要害

北上山地の山間部の小盆地に位置し、口内川左岸の丘陵上に立地する要害は浮牛城とも
称されました。小梁川氏・藤田氏・田手氏・古内氏が居館し、元禄7年(1694)には伊達
氏一族の中島利成が加美郡小野田本郷から所替となり、以後は中島氏歴代が襲封しました。

山上の武彦神社境内にあたる本丸を取巻くかたちに二段の檀があり、その南東面には重
臣の屋敷があったとされ、西門・土門・鬼丸などの地名が残されています。空堀には折歪
があり、本丸の枳形虎口は近世初頭に改築されたと考えられています。

『上口内村風土記』には家中屋敷80軒、家中小路に四軒町・袋小路・西小路・荒町・新小路・
向小路・八谷崎小路・飛町がありました。

曹洞宗宗賢寺には古内義如の墓所があり、安倍貞任が干天のとき槍で岩を突いて水を出
したと伝える清水は一日に10石の水量があったことから、その地を十石と称したといひ
ます。

(5) 人首要害

北上山地の一支脈である阿茶山^{あちや}が人首川方向へ突き出した丘陵の北西端にある山城で、室町時代には人首氏が当地を領していたと伝えられています。天正 19 年 (1591) に伊達政宗領となって以後、慶長 11 年 (1606) には伊達氏一族で 1,000 石余を領した沼辺重仲^{しげなか}が封ぜられ、人首要害として屋敷地の改修や町場の整備を行いました。

要害は館山と称する山頂部の平坦地に本丸、その西に二の丸、下方には腰曲輪^{こしぐわ}があり、本丸南西隅に大手門が所在しました。館山麓^{あずかり}の南北にかけて家中屋敷が取り囲み、西端に町屋、町屋から南に続く街道に沿って預足軽屋敷、東方には白山権現を配置。城下入口に一の木戸^{きど}、腰曲輪までの館坂に二の木戸・三の木戸が設けられていました。侍屋敷 57 軒、足軽屋敷 7 軒、寺 2 軒、ほかに仙台藩直属の足軽 (預足軽) 20 人を預けられ、沼辺氏歴代が幕末まで当地を治めました。

『人首村風土記』によると、町場は人首町と総称し、重臣屋敷からなる本宿小路^{もとじゆく} (本小路) のほか、荒町^{あらまち}・上小路^{ひでた}・日照田^{ひでた} (日出田)・源兵衛坂と、預足軽の配置された馬場小路などから構成されていました。

嘉永 2 年 (1849)、盛岡藩領に発生した一揆が仙台藩領に越境しようと遠野に集合した際、防備のため岩谷堂伊達家の家臣団が人首要害に集結しました。



人首除地圖 明治 2 年 (1869)

2 所（ところ）

一国一城令によって破却^{はきやく}された中世城郭の二の丸付近やその山麓に居館を構えたものや、町場近くに新規に方形居館を造営したものが多く、居屋敷、家中・足軽屋敷、町場などが整備された城下が形成されています。

（1）前沢所

現在の前沢市街地の一帯を占め、東は目呂木村^{もくろぎ}、西は小山村、南は白鳥村、北は関村に隣接しています。奥州街道が通り、その宿場町となっており、伊達家臣が当地を拝領して在住。その家中屋敷地も設置されていました。

町場三町（三日町・七日町・新町）と領主屋敷・家中屋敷などの拝領地は村扱いとは異なり、領主の管轄下にありました。天正 19 年（1591）の豊臣秀吉の奥羽再仕置により葛西氏旧領から伊達政宗の領地になると、家臣の大内氏、次いで成田氏、飯坂氏が配され、天和 2 年（1682）に三沢氏が 3,000 石で入封^{にゅうほう}した以後は、歴代が襲封して幕末に及びました。

三沢氏は出雲国三沢（島根県仁多郡）の出自とされ、万治 2 年（1659）に伊達家に出仕。三沢宗直は藩主伊達綱宗の側室であった三沢初子の弟で、初子は綱村（藩主）^{むらより}、村和（水沢伊達家当主）を産み、藩主の親族となったことから一門に召出されました。

『前沢村風土記』によると、居屋敷 1 軒、町場 3 町、家中屋敷 180 軒（うち侍屋敷 80 軒・足軽屋敷 100 軒、ほかに追加拝領の屋敷 2 軒）、御預給主屋敷 13 軒、御預足軽屋敷 75 軒などが書上げられています。

（2）野手崎所（小梁川館）

江刺郡野手崎村の西方の烏帽子山（通称お館山）の中腹に築かれた居館で、小梁川館とも称されています。仙台藩では正保元年（1644）に重臣の小梁川宗影^{むねかげ}を当地に配置。小梁川氏は家臣 36 人、足軽 12 と仙台藩から預けられた預足軽 20 人とともに入封し、居館を中心に城下の整備を行いました。

館山を背にした居館の周辺には堀がめぐらされており、茶間・台所・広間・勝手・居間・馬屋などがあったほか、大手門・北門が設けられ、東方には家臣屋敷が配置されていました。

町場（野手崎町）には町人町の二日町・三日町、家臣屋敷町の南小路・中小路^{なか}・大手小路・桜小路・北小路が形成されており、現在も小梁川家の居館へと至る大手口と枳形^{ますがた}が現存しています。居館跡には建物礎石が部分的にみられ、周辺には的場跡などの地名が残っています。



野手崎所（小梁川館）大手口

【コラム】

地頭もつらいよー地方知行と農業政策ー

近世の胆江地方は仙台藩の北辺領域でした。隣接の盛岡藩とは藩境決定を巡って長期にわたる政治論争が繰り広げられたことでも知られています。したがって、仙台藩にとって藩境地域である胆江地方は政治・軍事の面で重要視されましたが、同時に広大な土地は藩財政を支える穀倉地帯として積極的な農業政策も進められました。

ところで、仙台藩では伊達家の親族や上級家臣に対しては、コメや金銭などの給与ではなく、領地を支給するという「地方知行制」を採っていました。それによって家臣たちは仙台城下に屋敷を構えると同時に知行地にも在郷屋敷を拝領し、自らが地頭として支配の任にもあたりました。

さて、領地を拝領した家臣たちは所領する郡村名と貫高（土地の価値）が明記された知行状を藩主より授与され知行地へと赴きます。ところが実際に現地に行くと“そこには知行状通りの貫高に見合う規模の田畑は無く、荒蕪地や野谷地が広がっていた”という状況が往々にしてあったようです。

実は仙台藩が行っていたのは「見込知行」で、今後開発可能な土地もあらかじめ見込んで所領地分配を行っていたようです。いわば“額面通りの収入を得たければ自ら開発せよ”とも受け取れる内容で、地頭たちからしてみれば理不尽にも思える制度だったともいえます。実際に胆江地方は山間地が多く、平野部は北上川の河岸段丘上の台地や氾濫原。豊かな土地とはいっても利水が不便で、農業も溜池による天水に頼っての稲作が中心となっており、未開地も多く存在していました。

そんな胆江地方に所領を得た地頭たちは、耕地開発とともに堤・溜池の整備や堰の開削など、様々な形での農業経営を実施しています。膨大な費用と時間を要し、それに動員される家来や農民たちの不満を抑えながらの農政事業は悩みの種であったかもしれません。しかし、その政策も徐々に功を奏し、62万石を公称する仙台藩全体の内高（実高）は正保年間（1644～47）で74万石、さらに天保年間（1830～43）までには約100万石の規模にまで達しています。

胆江地方は日本有数の穀倉地帯として知られていますが、現代に見る田園風景の基礎は仙台藩の農業政策によって築かれたものといえます。





江刺郡野手崎村之内新田二望被申所之事

明暦2年(1656)

梁川伊達家文書

仙台藩では、江戸時代初期に新田開発を進めていました。

開発された新田は、担当の郡奉行所^{こおりぶぎょうしょ}に報告・確認の上で、正式に新田として認められました。江刺郡は奥郡奉行の管轄で、野手崎村についても、奥郡奉行が確認を行った上で、仙台藩中央の奉行に報告し、新田として認可されています。



渡邊喜兵衛宛伊達綱村朱印状

寛文12年(1672)

小山油地渡邊家文書

仙台藩では、藩主の代替わりや仙台藩士の相続の際に、藩士宛に藩主の印判を捺した知行安堵の文書を発行しました。

本文書では、伊達綱村が渡邊喜兵衛に対し、寛文12年(1672)に与えられた新知行地を安堵しています。本文書に登場する渡邊家は、元々伊達宗勝に仕えていましたが、寛文事件(伊達騒動)で宗勝が失脚した影響で、胆沢郡南下葉場村^{みなみしたはば}に知行地が移り、在郷の御番外士となった家です。

3 在所（ざいしょ）・在郷屋敷（ざいごうやしき）

在所は平地に新規に居館を構えたもの。農地や山林に囲まれた知行地内に居屋敷、家中・足軽屋敷などが設けられますが、町場を欠いており、要害・所のような城下町と呼べる様相には発展せず、農村や集落の規模がほとんどです。

在郷屋敷は、広義では要害・所・在所も含まれますが、藩が公的に認めた屋敷以外にも藩士が単に居宅として知行地内に設けた屋敷も存在しました。なお、胆江地方に在所はなく、藩士の居宅がいくつか点在しました。

（1）上門岡村（柏原館・中目館）

北上山地の西端部、江刺郡上門岡村内に位置する柏原野の丘陵に立地。この地は仙台・盛岡両藩の藩境である下門岡村の寺坂番所へ通じる要衝でもあり、500石を知行した伊達一家の中目氏が寛文元年（1661）に屋敷を設けて歴代が幕末まで居住しました。中目氏屋敷の柏原館を中心に家臣9軒の屋敷が配置されているのみで、周囲は農村地帯。2名の農民が仙台・盛岡両藩の藩境塚の維持・管理にあたる御境目古人に任命されていました。



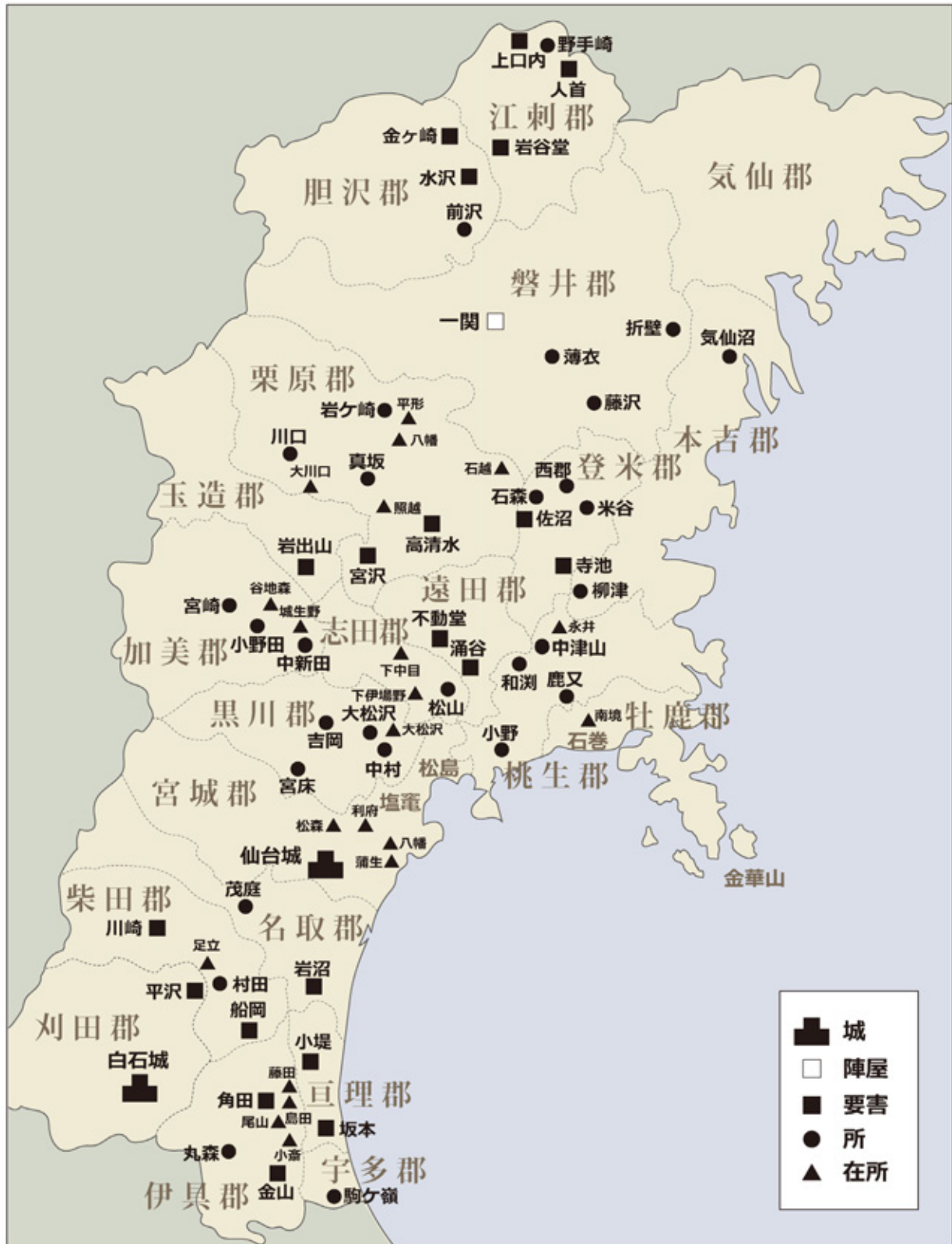
上門岡村 中目館跡

（2）下衣川村（遠藤屋敷）

下衣川村は衣川流域を占め、中尊寺が所在する関山の北麓と一首坂段丘に囲まれた盆地に立地しています。東と南は磐井郡中尊寺村、西は上衣川村、北は白鳥村に隣接。近世には奥州街道が通り、瀬原に警備のため足軽が配置されていました。古宿・宿・六日市場・七日市場・八日市場などの旧跡があり、屋敷名数は84軒、衣川北岸の清水の上に本穀蔵・吹屋・囲糲蔵からなる仙台藩の御蔵場があり、当村のほか、上衣川村、磐井郡戸河内村の年貢米を収納しました。富田地内には伊達氏一族の遠藤氏が居宅を設け、墓所のみが現存しています。



遠藤氏墓所



仙台藩の城・要害・所・在所拝領分布図

【コラム】

国外の仙台藩領と拠点

仙台藩は62万石を公称していますが、本領である陸奥国内での領内収益は全て合わせても60万石。残りの2万石は近江国(滋賀県)の羽田に1万石、常陸国(茨城県)の龍ヶ崎に1万石の「飛地」があり、それらを合わせて62万石となります。

なぜ本国から遠く離れた地域に所領地があったのかというと、江戸時代の大名は江戸と京都にそれぞれ藩邸を置いており、仙台藩にとって近江国羽田は京藩邸の賄料、常陸国龍ヶ崎は江戸藩邸の賄料としての性質がありました。各飛地には陣屋が置かれていたので、それらも仙台藩の拠点といえるかもしれません。

それに加えて幕末に蝦夷地の警備を幕府から命じられた仙台藩は、担当地域であった蝦夷地南部の白老に元陣屋を構え、広尾・厚岸・根室、さらに北方領土である国後・択捉にも出張陣屋を設置していました。

このように、陸奥国外の各地に仙台藩の拠点が所在していました。



白老元陣屋之図（江戸時代末期）
南鱗文庫 蔵

III 奥州市の近世遺跡

1 近世遺跡の諸相

近世遺跡が注目されるようになったのは、バブル経済の最中、東京都内で都市開発が急激に進行し、それに伴って、地下に眠っていた多くの大名屋敷跡が発掘調査されたことを発端とします。有名になった遺跡のひとつに東京都港区新橋の汐留遺跡^{しおどめ}があります。汐留遺跡では、大規模な大名屋敷跡群と明治時代の旧新橋駅停車場跡の発掘調査が行われて、全国的に注目されました。大名屋敷跡は、仙台藩上屋敷・会津藩中屋敷も含まれて、各地で作られた陶磁器などが多く出土し、当時の大名と武士の暮らしが紹介されました。

近年、奥州市では、近世遺跡の発掘調査件数が増加し、多彩な遺跡が発掘調査されています。主な遺跡としては、仙台藩の城跡（要害）、北上川沿いに設けられた御蔵場跡^{おくくらば}、農村に点在する農民の屋敷跡、鋳物工房跡、領主層である武士の墓所、農民の墓地、奥州街道^{いちりづか}の一里塚跡などがあります。これらの遺跡では、遺構・遺物の特徴から仙台藩の地方支配、農村の生活、地方産業の様相などが垣間見られます。また、縄文時代・古代の集落や中世城館が所在した場所で検出されることがあり、古くから、立地的にも適した場所であったことが考えられます。

胆沢・江刺郡の中心となった仙台藩の城跡（要害）は、盛岡城跡や仙台城跡に見られるような全体が石垣で構築された城郭ではなく、中世城館と同じような土塁^{どるい}（土盛りした防壁）や切岸^{きりぎし}（斜面を削って人工的に造った傾斜面）によって造成された特徴があります。その一方で、被支配者層である農民の屋敷跡は、中世武士の館のような堀（溝）に区画された内部に母屋や付属建物、長屋門^{ながやもん}で構成された屋敷地に居住します。その起源は旧葛西家臣が帰農するケースがあつて後に近世の肝入^{きもいり}などを務める富農へと成長していきます。

近世遺跡から出土する遺物は、大半が陶磁器で、年代によって生産地や器種構成に違いがみられます。主に肥前国（佐賀・長崎県）で作られた有田焼を代表とする染付の磁器、瀬戸物で有名な瀬戸（愛知県）・美濃（岐阜県）の陶磁器、相双地域^{そうそう}（福島県）で作られた大堀相馬焼^{おほぼりそうまやき}などが大半を占めます。19世紀になると、東北各地でも様々な陶磁器が生産されるようになり、出土遺物として登場してきます。胆沢・江刺郡でも窯跡が確認されており、甕や播鉢などの陶器が焼かれていました。

発掘調査で明らかになった遺構・遺物は、当時を物語る第一級資料でもあります。無論、近世は古文書などが豊富にある時代で、発掘調査された城跡（要害）・屋敷跡・御蔵場跡なども記載されています。古代や中世では、遺構や遺物からの考察が中心となりますが、近世では遺構・遺物と文献資料をより具体的に比較することができ、当時の再現により近づくことが可能となります。

2 岩谷堂城跡—仙台藩要害の発掘調査—

岩谷堂城跡（岩谷堂要害）は、奥州市江刺岩谷堂字館山地内に所在し、標高 115 m の丘陵縁辺部上に位置する連郭式山城です。現在は、公園・学校グラウンドになっていますが、一部に遺構は残存しています。

城郭構造は、北に本丸を構え、中間に中曲輪（仮称）、南に二の丸で構成されます。居所である要害屋敷は、二の丸に位置しており、南側に枡形を構えて大手門とし、南麓の城下町へと大手道が続いています。本丸は最も高い場所に位置しており、その周囲を高さ 2 m の土塁が巡ります。主要三郭には、帯曲輪や腰曲輪が周囲に配置され、東側には人首川が位置するなど防御性が高いことが窺われます。城域の規模は、南北 700 m、東西 350 m に及び、岩谷堂の城下町を眼下に見下ろします。

築城時期については、中世の領主江刺氏の居城であったとされ、江刺郡の中心地であったと考えられます。後に、奥羽仕置によって主家葛西氏とともに改易され、岩谷堂城も接收されます。天正 19 年には、豊臣秀吉の家臣である大谷吉継による岩谷堂城の改修が行われ、近世城郭へと改修されています。

昭和 58 年（1983）に行われた二の丸の発掘調査では、堀跡や掘立柱建物跡などが検出されており、15 世紀代の古瀬戸や、16 世紀代の瀬戸美濃製品や中国産陶磁器、近世陶磁器など、江刺氏時代から岩谷堂伊達氏時代の遺物が連続して出土していることが注目されます。

近世城郭としての岩谷堂要害は、その立地条件から、南部藩領や沿岸地域へ繋がる諸街道の中継地点であって、上口内要害・人首要害・野手崎所と連携可能な江刺郡の戦略上重要な要害でもあります。



岩谷堂城縄張図（室野 2017）



本丸土塁（北から撮影）



本丸切岸（南西から撮影）

岩谷堂城跡



- | | | |
|--------------------|--------------------|-----------------|
| ① 中国（明） 染付皿 16世紀前半 | ② 古瀬戸 灰釉三足盤 15世紀 | ③ 瀬戸美濃 灰釉皿 16世紀 |
| ④ 中国 青磁端反碗 14世紀後半 | ⑤ 中国（龍泉窯） 白磁碗 15世紀 | ⑥ 古瀬戸 灰釉平碗 15世紀 |
| ⑦ 瀬戸 天目茶碗 15～16世紀 | | |



- | | | |
|---------------------|-----------------------|-----------------------|
| ⑧ 肥前 染付碗 17世紀後半 | ⑨ 大堀相馬 灰釉碗 18世紀 | ⑩ 大堀相馬 腰鑄碗 18世紀 |
| ⑪ 在地 小型壺 19世紀 | ⑫ 肥前 染付皿 17世紀末～18世紀後半 | ⑬ 大堀相馬 腰鑄碗 18世紀 |
| ⑭ 瀬戸 掛分蓋 18～19世紀 | ⑮ 大堀相馬 碗 18世紀 | ⑯ 肥前 染付皿 17世紀末～18世紀後半 |
| ⑰ 美濃 志野皿 17世紀前半 | ⑱ 大堀相馬 土瓶 19世紀前半 | ⑲ 大堀相馬 灰釉碗 18世紀 |
| ⑳ 大堀相馬 鉄絵灰釉碗 19世紀前半 | ㉑ 大堀相馬 褐釉碗 18世紀 | |

3 町屋敷遺跡—御蔵場跡の発掘調査—

町屋敷遺跡は、奥州市水沢真城字町屋敷地内に所在し、水沢段丘高位面の東縁辺部（標高 41 m）に位置します。遺跡のすぐ東側崖下は、北上川旧河道と氾濫原が広がる地形で、北側には、中世城館である瀬台野館跡が位置します。瀬台野館跡は、三つの郭によって構成されますが、江戸時代になると在郷屋敷（仙台藩士の横山弥右衛門が寛文 11 年（1671）の改易まで居住したとされる。）となり、正保 2 年（1645）



御蔵場跡から北上川を望む（西から撮影）

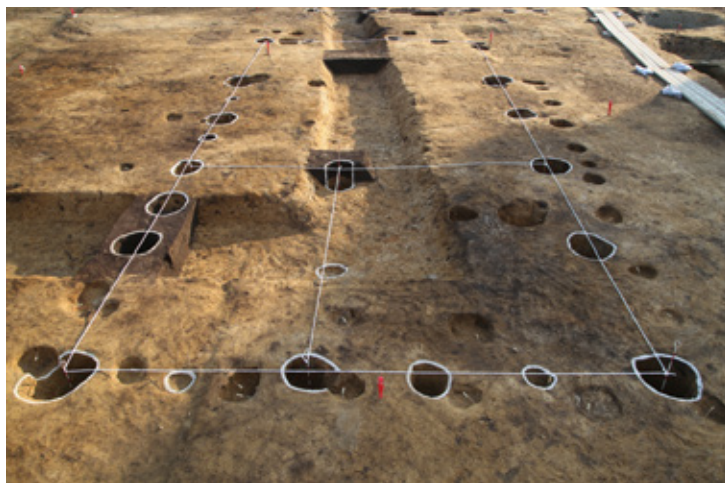
に旧三の郭へ「瀬台野御蔵」が置かれました。瀬台野御蔵は、およそ 70 年間、御蔵場と川湊として置かれていましたが、享保 5 年（1834）に跡呂井御蔵へ移されます。

平成 12・13（2000・01）年の発掘調査では、蔵跡と考えられる平面形が細長い長方形の建物や、庇が付属する直屋建物など掘立柱建物跡 27 棟が検出されました。これらの掘立柱建物跡は、建物構造から御蔵場に関係する施設と考えられます。出土遺物は、近世陶磁器を主体としていますが、一部に 16 世紀から 17 世紀初頭の陶器が含まれています。おそらくは、瀬台野館跡三の郭に関する遺物と考えられ、近世初頭頃まで、城館が機能していたことも推察されます。

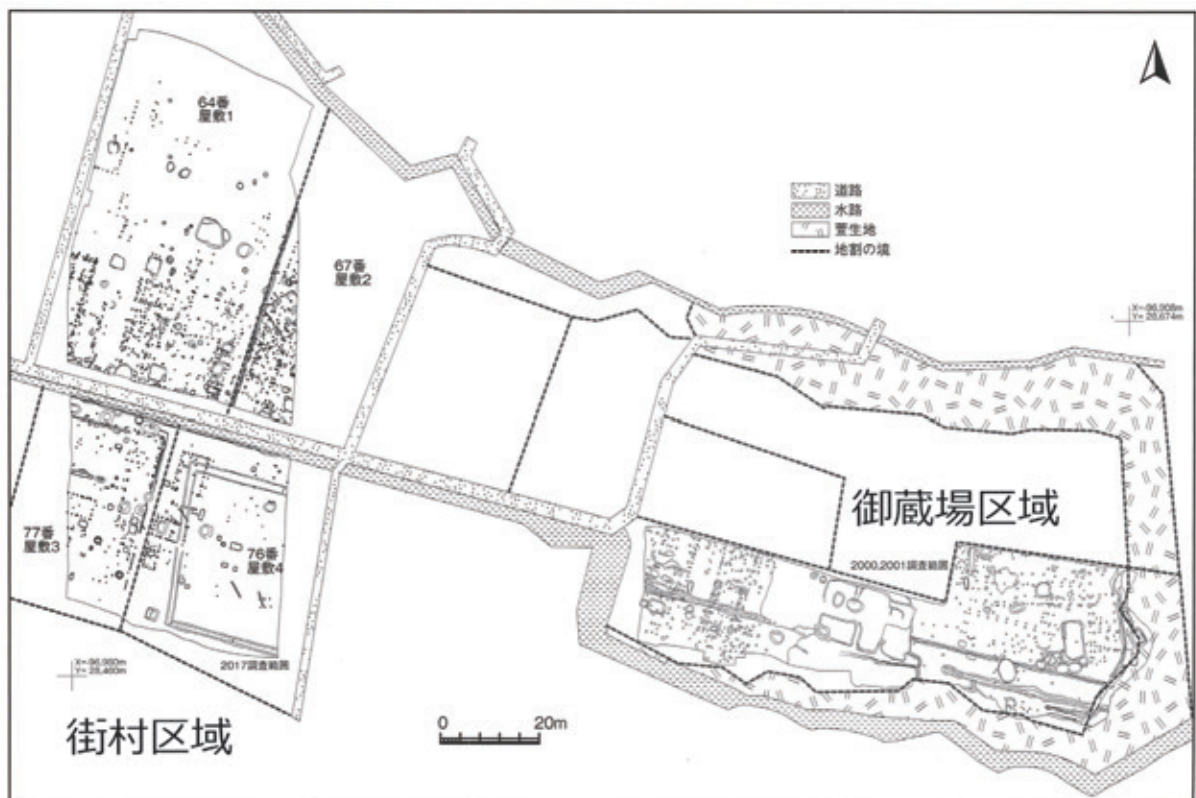
平成 29 年（2017）の発掘調査では、御蔵場跡の西側が対象となり、町屋敷の地名由来となる街村（がいそん）が検出されました。調査区からは、掘立柱建物跡 54 棟、近世から近代に至る多彩な国産陶磁器などが見つかりました。その中でも溝跡に区切られた屋敷跡 4 か所が検出され、内部が主屋、付属屋などによって構成されていることがわかりました。遺跡の年代は、出土遺物から 17 世紀中頃には成立しており、御蔵場移転後も、近代にいたるまで街村として機能していたようです。



平成 29 年度調査区全景（南から撮影）
岩埋文 2019



近世の掘立柱建物跡（北から撮影）
岩埋文 2019



町屋敷遺跡全体図（岩埋文 2019）



- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| ① 美濃 灰釉皿 16世紀前半 | ② 美濃 灰釉皿 16世紀前半 |
| ③ 瀬戸 播鉢 16世紀末～17C初頭 | ④ 肥前 呉器手碗 17世紀後半～18世紀前半 |
| ⑤ 肥前 染付碗 磁器 17世紀後半 | ⑥ 肥前 青磁釉皿 17世紀末～18世紀後半 |
| ⑦ 肥前 京焼風皿 17世紀後半～18世紀前半 | ⑧ 肥前 銅緑釉皿 17世紀後半～18世紀前半 |
| ⑨ 肥前唐津 灰釉皿 16世紀末～17C初頭 | |



お歯黒壺（江戸時代）
町屋敷遺跡

【コラム】

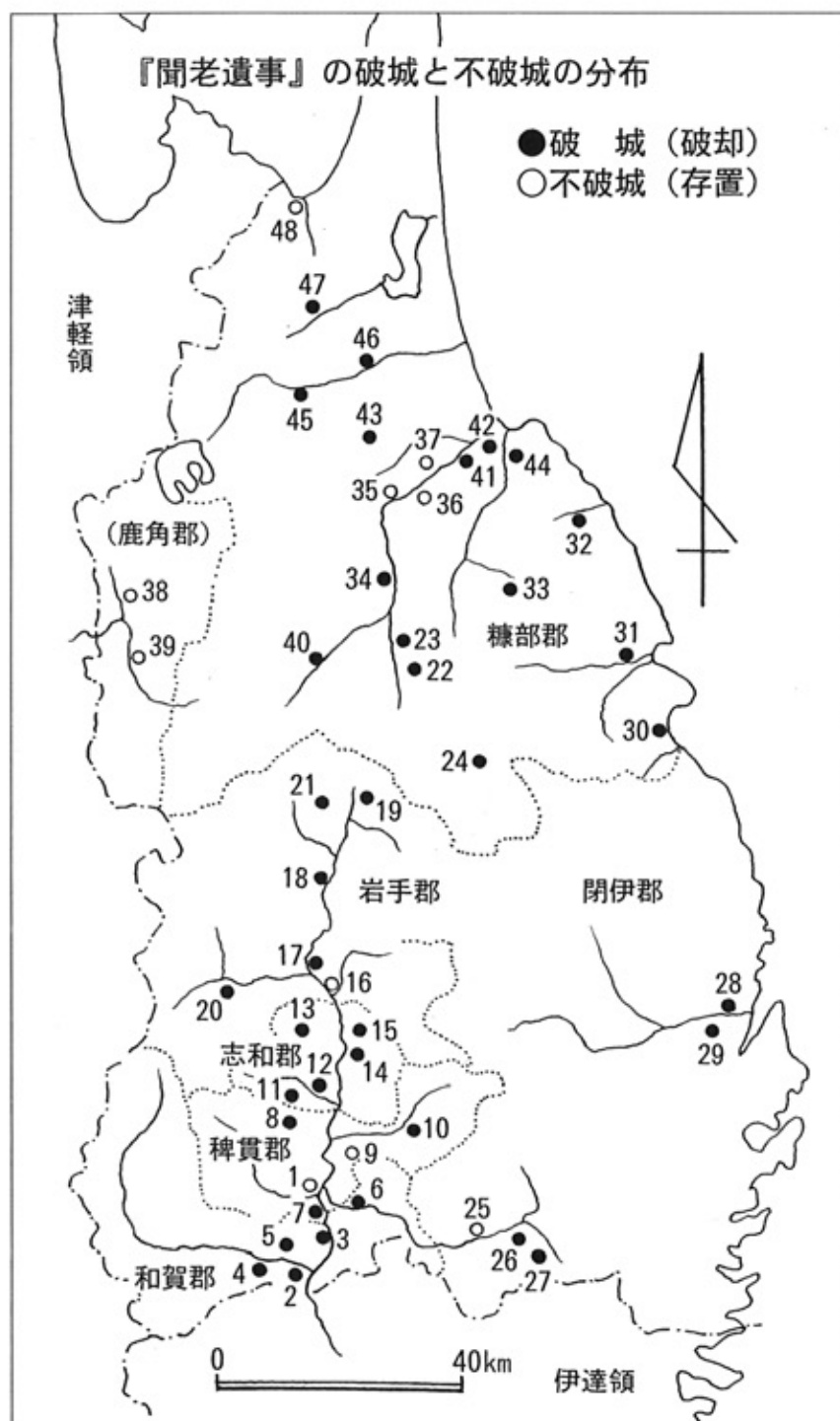
中世城館のゆくえ

胆沢・江刺郡には、およそ 200 か所以上の中世城館があると考えられますが、近世になると、ほとんどの城館が姿を消します。豊臣秀吉は全国へ勢力を拡大しながら、国内に数多く存在した中世城館を整理して、城破り（城の破却。城割とも）を進めます。後に、徳川幕府によって慶長 20 年（1615）に一国一城令が発令されると、さらに城破りが強化されます。ところが、調べてみると、江戸時代前期には、未だ全国に多くの城館が残るようです。

南部領では、天正 20 年（1592）の「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事」（『聞老遺事』）によると、末文に南部領諸城のうち、12 城を残して 36 城を城破りした記述があります（本文では実数が 10 城を残して 38 城を城破り）。ただし、実のところは、城破りが本格的に進められるようになるのは一国一城令が発せられる慶長 20 年前後であり、城館の発掘調査で 16 世紀末～17 世紀初頭の遺物が出土していることが、それを物語っているといえます。

伊達領北辺では、奥羽仕置後に城破りを進める一方で、中世城館が近世城郭へと改修されます。豊臣政権下では、大谷吉継が岩谷堂城、上杉景勝が大林城（金ヶ崎町）、石田三成が大原城（一関市大東町）と気仙城（陸前高田市）を改修しますが、大林城以外は、その後も近世城郭としてしばらくは活用され、後の要害や所へと移行していきます。中世柏山氏の居城であった大林城がそのまま要害へと発展しなかった理由としては、地理的・地形的な要因があると考えられます。近世大名は城下町を構想する上で、軍事拠点ではなく、経済の発展を促す町場や宿駅などの城下町を必要とします。伊達政宗は、大林城より、平坦部が広い水沢城を伊達領北辺の中心地としたことが想像されます。

ところが、仙台領内だけでもかなりの数の中世城館が遺構として残り、そのほとんどが、一部を破壊するだけで、城館としての機能は完全に失われてはいませんでした。その中で、寛永 14 年（1637）に起こった島原・天草の乱は、一揆勢が城破りされた原城（長崎県南島原市）に立て籠って激戦が行われました。この出来事で幕府は危機感を覚え、城破りされた中世城館「古城」の所在を調査して、古城統制を進めるようになります。仙台藩でも古城の規模や場所などを調査させて『仙台領古城書上』を作成するなど領内の古城について注視するようになりました。



- | | | | | |
|----------|---------|---------|---------|---------|
| ①. 鳥谷崎 | 11. 片寄 | 21. 一方井 | 31. 久慈 | 41. 櫛引 |
| 2. 鬼柳 | 12. 肥爪 | 22. 姉帯 | 32. 種市 | 42. 八戸 |
| 3. 二子 | 13. 見舞 | 23. 一戸 | 33. 古軽米 | 43. 中市 |
| 4. 山(岩)崎 | 14. 長岡 | 24. 葛巻 | 34. 金田一 | 44. 新田 |
| 5. 江釣子 | 15. 乙部 | ②⑤. 増沢 | ③⑤. 三戸 | 45. 沢田 |
| 6. 安兵 | ①⑥. 不来方 | 26. 横田 | ③⑥. 名久井 | 46. 洞内 |
| 7. 十二丁目 | 17. 厨川 | 27. 板沢 | ③⑦. 剣吉 | 47. 七戸 |
| 8. 寺林 | 18. 下田 | 28. 千徳 | ③⑧. 毛馬内 | ④⑧. 野辺地 |
| ⑨. 新堀 | 19. 沼宮内 | 29. 田鍬 | ③⑨. 花輪 | |
| 10. 大迫 | 20. 滴石 | 30. 野田 | 40. 浄法寺 | |

4 川岸場Ⅱ遺跡—大肝入屋敷跡の発掘調査—

川岸場Ⅱ遺跡は、奥州市前沢白山字川岸場地内に所在し、すぐ東側に北上川が隣接することから、仙台藩の御蔵場である「六日入御蔵」が置かれていました。六日入御蔵は、大肝入・舟肝入を務めた鈴木家が管理し、隣接する屋敷は「大室屋敷」と呼ばれていました。鈴木家は、菅江真澄が滞在するなど、江戸時代の豪農として時折史料に登場します。

平成8～9年（1996～97）の発掘調査では、調査区の北側に屋敷跡、南側に御蔵場跡が検出されました。屋敷跡と御蔵場跡は、ともに方形に巡らされた堀跡によってそれぞれが区画されています。屋敷跡は、母屋とされる掘立柱建物跡が検出されており、3回の建て替えが確認されています。平成9年の住宅移転まで礎石建の薬医門があったことや、屋敷地内に礎石が散乱していたことから、大肝入となった宝暦4年（1754）以降には母屋が礎石建物となったと考えられます。母屋の北側には高さ1～1.5mに盛られた土塁跡や、東側には長さ37m、高さ0.7mほどの石垣跡も検出されています。また、屋敷跡の西側には鈴木家墓地があり、礎石経塚や天正6年（1578）銘の板碑を中心に、144基の墓標など累代の鈴木家一族が埋葬されています。

屋敷跡の南側にある御蔵場跡からは、掘立柱建物跡11棟が検出され、すべてが細長い長方形の直屋建物で、土蔵と推察されています。掘立柱建物跡群は、複数回の建て替えがあって江戸時代を通じて長く御蔵場として機能していたことが窺われます。

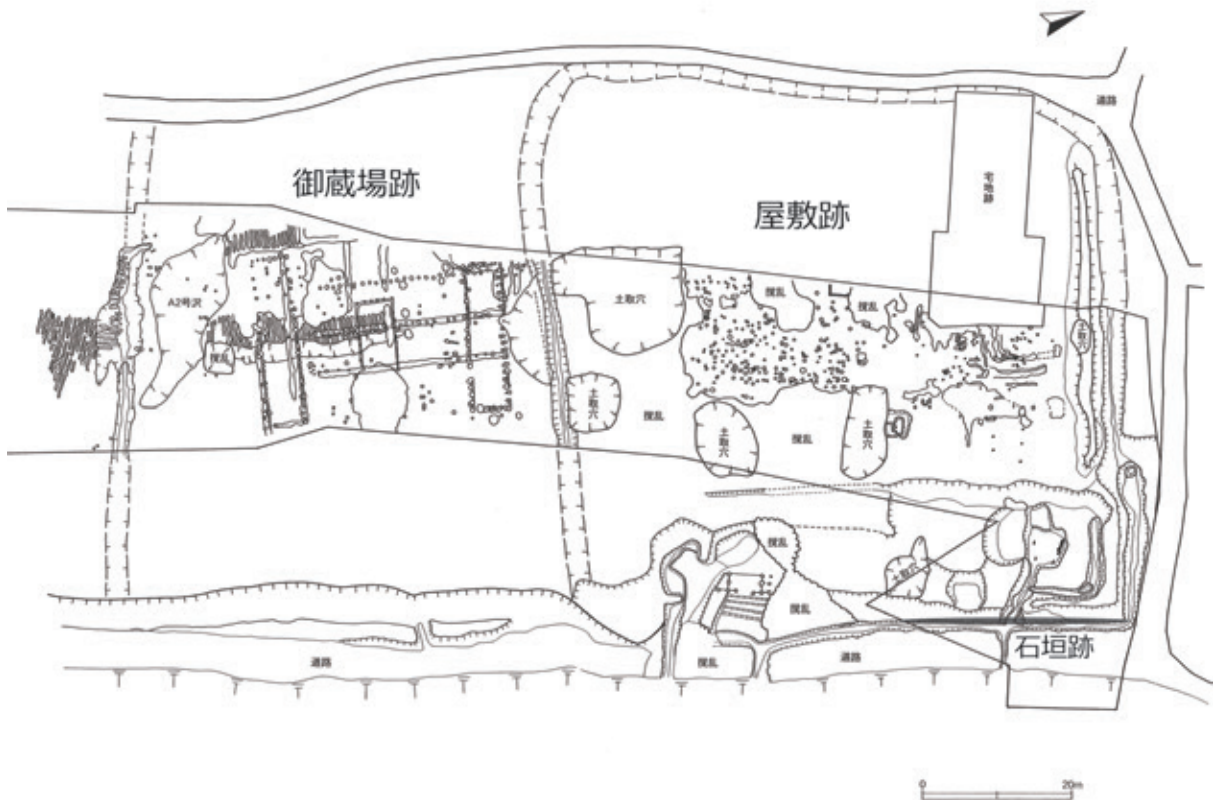
遺物の大半は屋敷跡から出土しており、18～19世紀の肥前・瀬戸・大堀相馬の陶磁器など、江戸時代における豪農の生活が垣間見られます。



平成8年度調査区全景（東から撮影） 岩埋文 2000



石垣跡（南東から撮影） 岩埋文 2000



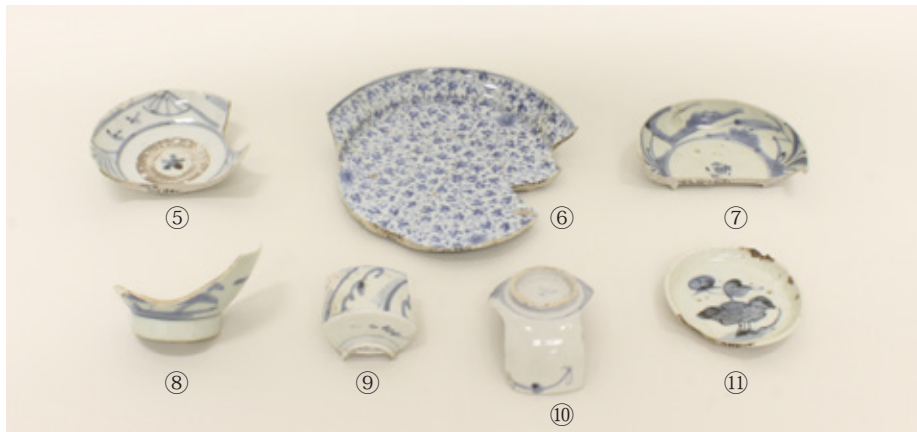
川岸場Ⅱ遺跡全体図 (岩埋文 2000)

川岸場Ⅱ遺跡

(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



① 瀬戸美濃 天目茶碗 16世紀 ② 瀬戸美濃 天目茶碗 16世紀
③ 肥前唐津 灰釉皿 16世紀末～17世紀初頭 ④ 中国 染付皿 15世紀後半～16世紀前半



⑤ 肥前 染付皿 17世紀末～18世紀後半 ⑥ 肥前 染付大皿 18世紀前半 ⑦ 肥前 染付皿 17世紀末～18世紀後半
⑧ 肥前 染付広東碗 18世紀末～19世紀前半 ⑨ 肥前 染付筒形碗 18世紀後半 ⑩ 肥前 染付碗 17世紀末～18世紀後半
⑪ 肥前 染付皿 18世紀後半



⑫ 肥前 刷毛目碗 18世紀前半 ⑬ 大堀相馬 藁灰釉碗 19世紀前半 ⑭ 肥前 香炉類 18世紀
⑮ 大堀相馬 藁灰釉土瓶蓋 19世紀 ⑯ 大堀相馬 藁灰釉皿 19世紀 ⑰ 砥石 近世以降
⑱ 碁石 近世以降 ⑲ 桔梗台(窯道具) 近世

【コラム】

あ ん え い ふ ど き 安永風土記にみえる屋敷

現在、奥州市胆沢では、散居集落と呼ばれる屋敷群が水田地帯に点在しており、母屋・厩・蔵・長屋門などの建物をエグネ（屋敷林）やキヅマ（薪を積み上げた堀）によって囲まれた屋敷地が残っています。これらの屋敷地は、中世に多くみられた武士の館（平面形が方形で堀によって区画される館。奥州市水沢佐倉河字仙人の仙人西遺跡など）と類似しており、学術用語として「豪族屋敷^{ごうぞくやしき}」とも呼ばれています。

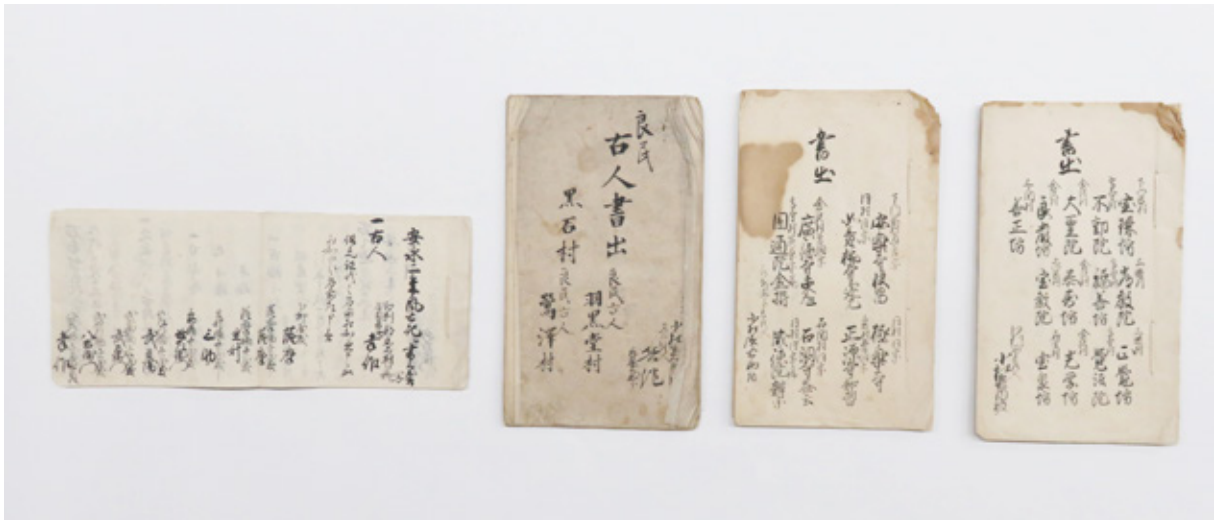
豪族とは、土豪（農村の有力者）をさし、平時は農業に従事し、戦時は戦に参加する土着武士のことを言います。その起源は、奥羽仕置によって改易された葛西旧臣が、兵農分離により帰農して、元々所有していた土地を開墾して豪農へと成長したことに始まります。『安永風土記』には、仙台藩領内に多くの屋敷名が記載されており、「館・古館」などの城館に由来する屋敷名が多くみられます。また、彼らは、農村の大肝入^{おおきもいり}や肝入になるなど、農村の実力者としても登場しています。

近年の発掘調査では、多くの屋敷跡が検出されています。奥州市水沢真城字下植田地内に所在する下植田遺跡から検出された屋敷跡は、母屋や付属棟とされる掘立柱建物跡、井戸跡やその周囲を取り囲む溝跡で構成されており、『安永風土記』に登場する「下植田屋敷」と考えられます。屋敷跡は、他にも川岸場Ⅱ遺跡の「大室屋敷」、石行遺跡の「石行屋敷^{いしぎょうやしき}」、境田遺跡の「大境田屋敷・小境田屋敷^{さかいだ}」、亀田遺跡の「亀田屋敷」など、同じような屋敷構成をする遺構群が検出されています。このような屋敷は、武士との身分格式があるため、厳しい家作禁令^{かさくきんれい}（住宅の規模や梁間制限など）があって身分相応の建物に居住する制限もありますが、多彩な出土陶磁器からみると、裕福な経済状況であったことも窺えます。



▲ 仙人西遺跡の堀跡（東から撮影） 水埋文 1997

◀ 下植田遺跡の屋敷配置図 水埋文 2003



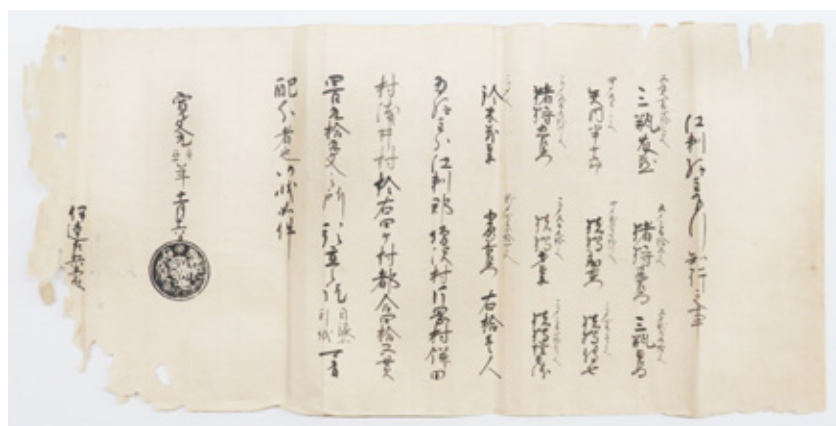
風土記御用書出

安永年間 (1772 ~ 81)

下柳千葉家文書

村名の由来、田畑の収穫高、男女別人口、家数、牛馬の数、名所旧跡、寺社、山川、堤、産物、道、村境など所定の項目について書き上げた「風土記御用書出」を中心に「古人書出」「神職書出」「寺院書出」などから構成される地誌。仙台藩が安永年間 (1772 ~ 81) に村または知行所単位で提出させたもので、一般には「安永風土記」といわれています。

このような構成の記録群は、他藩で作成された風土記と比べても膨大かつ詳細な記載内容で、全国屈指のものであるとされています。現代においても江戸時代中期の仙台藩の藩勢・地理・自然・伝承が記録された根本資料であり、領内地域の成立や諸相について究明する不可欠な史料群に位置づけられています。



伊達宗規宛伊達綱村黒印状

寛文元年 (1661)

岩谷堂猪狩家文書

御給主とは、仙台藩士ながら、特定の藩士に預け置かれている身分の武士のことです。岩谷堂伊達家に預けられている御給主は、元岩城家の家臣だった人々で、岩城家の改易後にも行動を共にしていた一党です。彼らの知行地については、岩谷堂伊達家に一括で預け置かれ、それぞれの給主には知行地の詳細を書いた知行割目録が与えられていました。

5 下嵐江 I・II 遺跡—藩境集落跡の発掘調査—

下嵐江 I・II 遺跡は、奥州市胆沢若柳字東下嵐江地内に所在します。かつて、この場所には、藩境の集落が存在しました。下嵐江の集落は、仙北街道沿いに位置しますが、険しい山中への手前に所在することから交通路・輸送路の宿駅として重要視され、下嵐江御番所、伝馬継立の馬宿、荷宿などの宿場町があったとされます。胆沢ダム建設までは多くの古い民家や社が残る家々も点在していました。

仙北街道は、仙台藩領と秋田藩領を結ぶ脇街道の一つで、水沢字袋町周辺を始点として西へと進み、下嵐江 I・II 遺跡と猿岩の間を通り、山間部を抜けて秋田県東成瀬村手倉へと通じます。下嵐江 I・II 遺跡の東側には、猿岩（猿の顔に似ていることから名付けられたと伝えられる。）があり、その山中には古代式内社の一つである於呂閑志神社奥宮が鎮座しています。

平成 19～21（2007～2009）年に行われた胆沢ダム建設工事に伴う発掘調査では、近世の掘立柱建物跡 30 棟で構成される集落の一部や、16 世紀半から近現代に至る陶磁器が見つかり、古い時代から人びとが暮らしていた痕跡がわかりました。調査区からは、掘立柱建物跡が密集している場所があり、何度か建替があったことがわかります。この掘立柱建物跡群は、仙北街道に沿って並んでいたことがわかり、一部が『安永風土記』に記載される屋敷跡と考えられます。



下嵐江御番所跡（西から撮影）



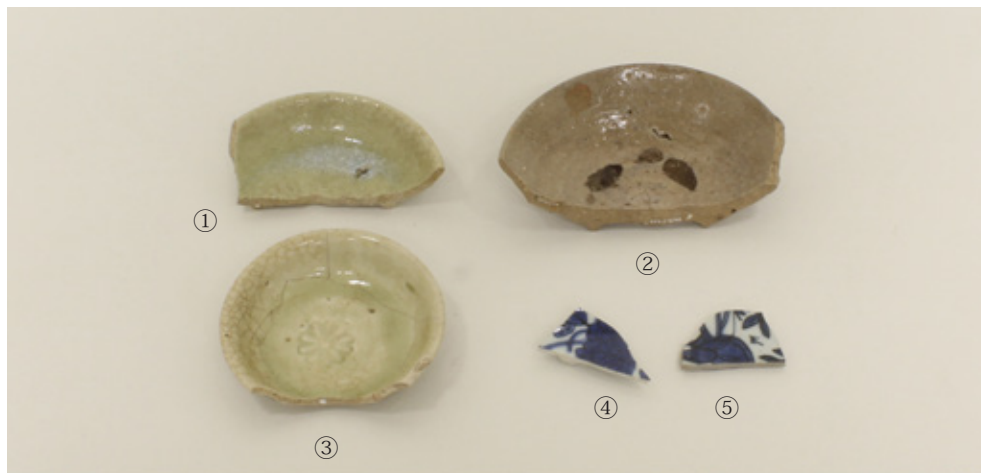
於呂閑志神社奥宮（東から撮影）



猿岩と調査区全景（西から撮影） 岩埋文 2013

下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



① 瀬戸美濃 灰釉皿 16世紀後半 ② 肥前唐津 灰釉皿 16世紀末～17世紀初頭 ③ 瀬戸美濃 灰釉皿 16世紀前半
④ 明 染付碗 16世紀末～17世紀初頭 ⑤ 明 染付碗 16世紀末～17世紀初頭



⑥ 肥前 染付皿 17世紀末～18世紀後半 ⑦ 肥前 染付皿 18世紀後半～19世紀前半 ⑧ 肥前 染付皿 18世紀後半～19世紀前半
⑨ 肥前 染付皿 17世紀末～18世紀後半 ⑩ 肥前 銅緑釉皿 17世紀後半～18世紀前半 ⑪ 肥前 染付小皿 17世紀末～18世紀後半
⑫ 肥前 染付仏飯器 18世紀後半～



⑬ 相馬 灰釉火入 18世紀後半 ⑭ 東北在地 灰釉皿 19世紀 ⑮ 相馬 灰釉皿 19世紀前半
⑯ 相馬 灰釉蓋 18世紀末～19世紀初 ⑰ 硯(石製品) 近世

【コラム】

奥州街道の一里塚

奥州街道（正式には奥州道中）は、仙台藩領を南北に縦貫する主要街道で、その沿線には、要害や所などが配置され、宿場町も整備されていました。本来の奥州街道は、併用する日光街道の一部（東京都中央区日本橋から栃木県宇都宮市）と白河以南（宇都宮～福島県白河市）を指しますが、一般的には白河以北から三厩（青森県外ヶ浜町）も含めて呼ばれるようになります。奥州街道を含む五街道は、江戸時代初期に徳川家康によって整備され、一里（約 4 km）毎に一里塚が設置されました。一里塚は、敷幅五間（約 9 m）四方、高さ 1 丈（約 1.7 m）の土盛の塚で、街道の両側に相対して築かせて、頂上に榎・松・杉などを植えさせたといわれています。無論、大名行列や旅人の距離標でもありました。現在、奥州市・金ヶ崎町内には、一部ですが一里塚跡が残され、発掘調査も行われています。

水沢要害への出入口にある真城一里塚跡^{しんじょういちりづか}は、奥州市水沢真城字中上野地内に所在し、仙台城下（宮城県仙台市青葉区北目町）から数えて 30 番目の一里塚です。昭和 44 年の国道 4 号バイパス工事で東塚が撤去されましたが、現在は西塚とそこに植えられていた杉の根元が残されています。

胆沢郡北端の奥州道中一里塚跡^{しみずばたいちりづか}（清水端一里塚）は、金ヶ崎町三ヶ尻川口田地内に所在し、仙台城下から数えて 33 番目の一里塚です。現在は、東塚だけが残されており、塚の上には樹齢約 400 年の杉が植えられ、その根元だけが今に残ります。その規模は、東西約 9 m、南北約 7 m、高さ 1.6 m あります。塚と杉が残っている事例は極めて少ない貴重な史跡です（金ヶ崎町教育委員会作成の現地説明版を参考）。

他にも発掘調査された事例として、徳沢一里塚跡^{とくさわいちりづか}（奥州市前沢白鳥字徳沢地内）の東塚があります。北上市二子町馬場野の奥州街道跡では、街道の道路遺構・側溝・土手などが検出されています。



真城一里塚跡（北西から撮影）



奥州道中一里塚跡（南西から撮影）

6 鹿野遺跡—鑄物工房跡の発掘調査—

鹿野遺跡は、奥州市水沢羽田町字御山下地内に所在し、丘陵の西側斜面部（標高 56-57 m）に位置します。遺跡が位置する羽田町は、古くから鑄物業が盛んであり、奥州市を代表する地場産業「南部鉄器」で有名な地域です。

平成 9 年（1997）に行われた発掘調査では、鑄物工房跡が検出されました。鑄物工房跡は一部の検出ですが、平面形が楕円形で、規模が南北 4.5 m 以上、



鑄物工房跡と大石（西から撮影） 水埋文 1998

東西 1.8 m で、床底には南北に沿って幅 50cm、深さ 12cm ほどの溝が掘りこまれていました。鑄物工房跡のすぐ北西側には作業場があって、粘土や炭化材・鉄滓を含む土で固く踏み締められていました。調査区の北側には、径 1.8 m の大石があり、小さな祠が祀られています。以前は、操業停止後に大石が運ばれてその上に大きな祠（金神様）が祀られていたとされます。

遺物は、溶解炉の炉体、不純物が固まった炉鉢、窯道具として使用したと思われる土製品、ふいごの羽口（送風管）、鑄型片、土製品、鉄釘、肥前の陶磁器（17 世紀後半～18 世紀後半）などです。溶解炉の炉体は、炉壁としてバラバラな状態で出土したものを接合したもので、2 個体が出土しています。炉体は、全体が円筒形で胴径 43cm、内径 37cm 前後、厚さ 2.1～3.5cm で、下の方に羽口の挿入口があります。ふいごの羽口は 10 個体以上が出土しており、ほとんどが熱で変形し、多くの鉄滓が付着していることから、かなりの頻度で使用されていたことが窺われます。土製品は、円柱状や、円形状のものがありますが、角柱状のものは、梵鐘などの大物鑄型の外型に使用された可能性があります。遺構の年代は、出土遺物から江戸時代前期から中期（17 世紀後半～18 世紀）にかけて操業されていたのではないかと考えられます。



羽口出土状況（北西から撮影） 水埋文 1998



炉体

【コラム】

幻の近世城郭—どうしょもりたてあと道所森館跡—

金ケ崎町六原堂所森道下地内に所在する道所森館跡は、周囲が平坦な段丘上に位置し、杉林が植林されている小高い山にひっそりと佇んでいます。この城郭は、伊達宗勝が、一関三万石の分知を得て大名となり、この地に築城したと伝えられます。宗勝は、元和7年（1621）年に伊達政宗の十男として生まれ、4代藩主伊達綱村の後見人となった人物です。宗勝は、寛文11年（1671）の寛文事件（伊達騒動）の



道所森館跡縄張図 金教委 1994

中心人物であり、後に改易されて土佐に配流されます。この間に築城途中であった道所森館は、完成間近に廃城となり未完成に終わったとされます。築城の目的は、要害・所と同じく南部藩に対する軍事拠点とすることや、新田開発を含めた新しい地域拠点を構想したことが考えられます。

城の構造は、標高117mの独立した丘陵上頂部に主郭しゅかくがあって、その下段に帯曲輪おびぐるわが主郭を囲んでいます。主郭は、北側に平坦部がありますが、南側がやや傾斜しており、普請途中であったことが窺われます。帯曲輪は、幅8～11mを測り、その外周部には土塁跡が巡っています。出入口である虎口こぐちは、東側と南側に痕跡を残していますが、やはり未完成で終わったものと考えられます。もし完成していたならば、地形的に主郭から六原一帯を眺望し、監視できる城郭であったと想像されます。

しかし、道所森館は、完成間近に廃城となりましたが、六原は藩境の重要な地域であったため、貞享2年（1685）には、藩境塚の南側に35名の足軽を配備して、六原三十人町が形成されています。

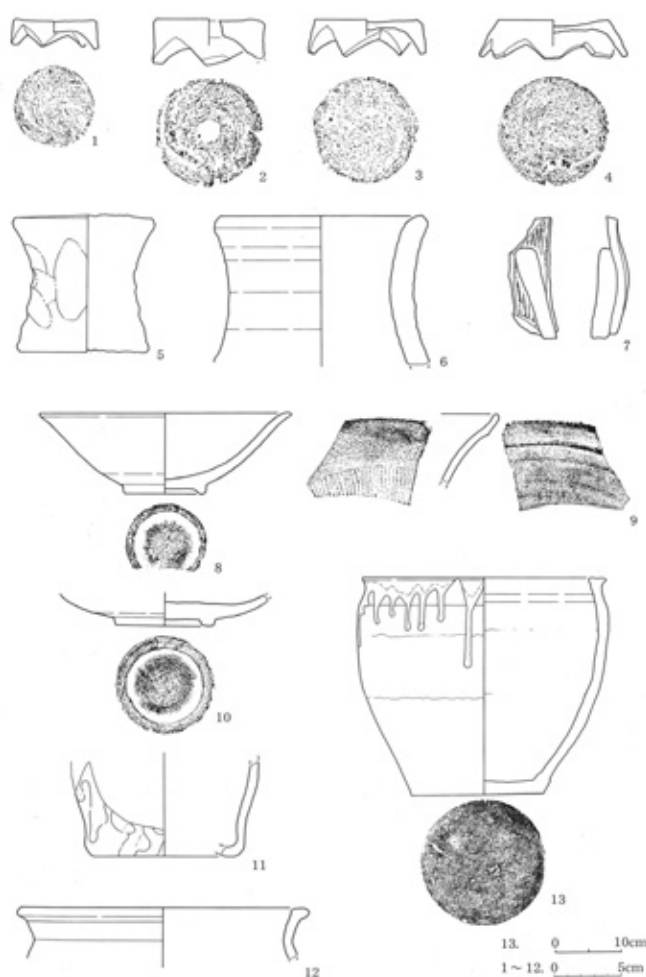


道所森館跡遠景（南から撮影）

7 前沢の窯業

江戸時代後期から盛んになった東北の窯業は、胆沢・江刺郡域でも開窯されるようになります。奥州市前沢では、江戸時代末期から明治時代にかけて民窯が盛んとなり、様々な陶器が作られました。

古森焼窯跡は、奥州市前沢生母字天王地内に所在し、標高約 60 m の丘陵斜面に立地します。やきものは、「天王古森焼」と呼ばれ、幕末に母体村の後藤兵蔵が、八戸藩の御用窯であった小久慈焼（久慈市）で製陶技術を習得した後、天王地区で良質の粘土を発見、屋敷内の傾斜地に登窯を築いて焼いたのが、その始まりとされます。やきものは、田舎風の厚ぼったい素朴な作りで、主に甕・鉢・播鉢・皿などの日常雑器が作られました。操業は、明治 21 年（1888）の兵蔵死後、息子の兵右衛門によって受け継がれましたが、明治 30 年頃には廃業したとされます。



天王古森焼実測図 前教委 2000

現在、窯本体は、昭和初期頃に失われたとされますが、窯跡周辺での分布調査では、播鉢・甕・碗・皿・窯道具などが採集されており、往時をしのべます。

専念寺山窯跡は、奥州市前沢字山下地内に所在し、標高約 60 m の段丘崖の急斜面に立地します。この窯跡は、幕末に三沢氏家臣であった土屋三代治が専念寺山でセトモノを焼いたことが伝えられており、土屋家と婚姻関係にあった阿曾沼家に「金子〇両瀬戸山に渡す」という記録が残っています。窯跡のあった場所は、昭和 30 年代頃まで「セトヤマ」と呼ばれていたとされます。窯本体の場所は、特定されていませんが、遺跡周辺での分布調査では、甕・播鉢・窯道具などが採集されており、窯場であった可能性が高いと思われます。

その他にも、前沢古城字丑沢地内で焼かれた陶器もあり、宅地の斜面に窯を築き、甕・皿・茶碗などを焼いていたとされています。その後、前沢の窯業は、鉄道開通に伴う物流の全国拡大によって、安価な陶磁器が大量に流通するようになり、明治時代にはその姿を消していきました。

古森焼窯跡



- ① 瓶類 19世紀 ② 窯道具・トチン 19世紀 ③ 碗 19世紀 ④ 窯道具・桔梗台 19世紀 ⑤ 窯道具・桔梗台 19世紀
⑥ 播鉢 19世紀 ⑦ 皿 19世紀 ⑧ 窯道具・桔梗台 19世紀 ⑨ 窯道具・桔梗台 19世紀
⑩ 播鉢 19世紀 ⑪ 瓶類 19世紀 ⑫ 鉢 19世紀

専念寺山窯跡



- ① 碗 陶器 19世紀 ② 小型甕 19世紀 ③ 瓶類 19世紀 ④ 窯道具・桔梗台 19世紀 ⑤ 窯道具・ハマ 19世紀
⑥ 播鉢 19世紀 ⑦ 鉢類 19世紀 ⑧ 鉢類 19世紀 ⑨ 鉢・碗類 19世紀 ⑩ 鉢類 19世紀



天王古森焼 甕

前沢生母の天王地内で江戸末期から明治30年頃まで開窯。

器種は甕類が多く、鉢類・片口・砂鉢・井・播鉢などの日用雑器が中心で、釉薬土は窯付近の大洞沢から求めたとされています。



岩谷堂服部 甕 銘 岩谷堂服部焼 文政十二年作
文政12年(1829)



(底部銘)
岩谷堂
服部焼
文政十二年作

江戸後期に操業したとみられ、窯跡付近からは陶片や瓦片が僅かに表採されていますが、現存品は唯一、本品のみが伝えられています

服部は岩谷堂の南町にある地名で、人首川に臨んだ斜面に窯場が設けられ「瀬戸場」と称されていました。

【コラム】

近世陶磁器の流通

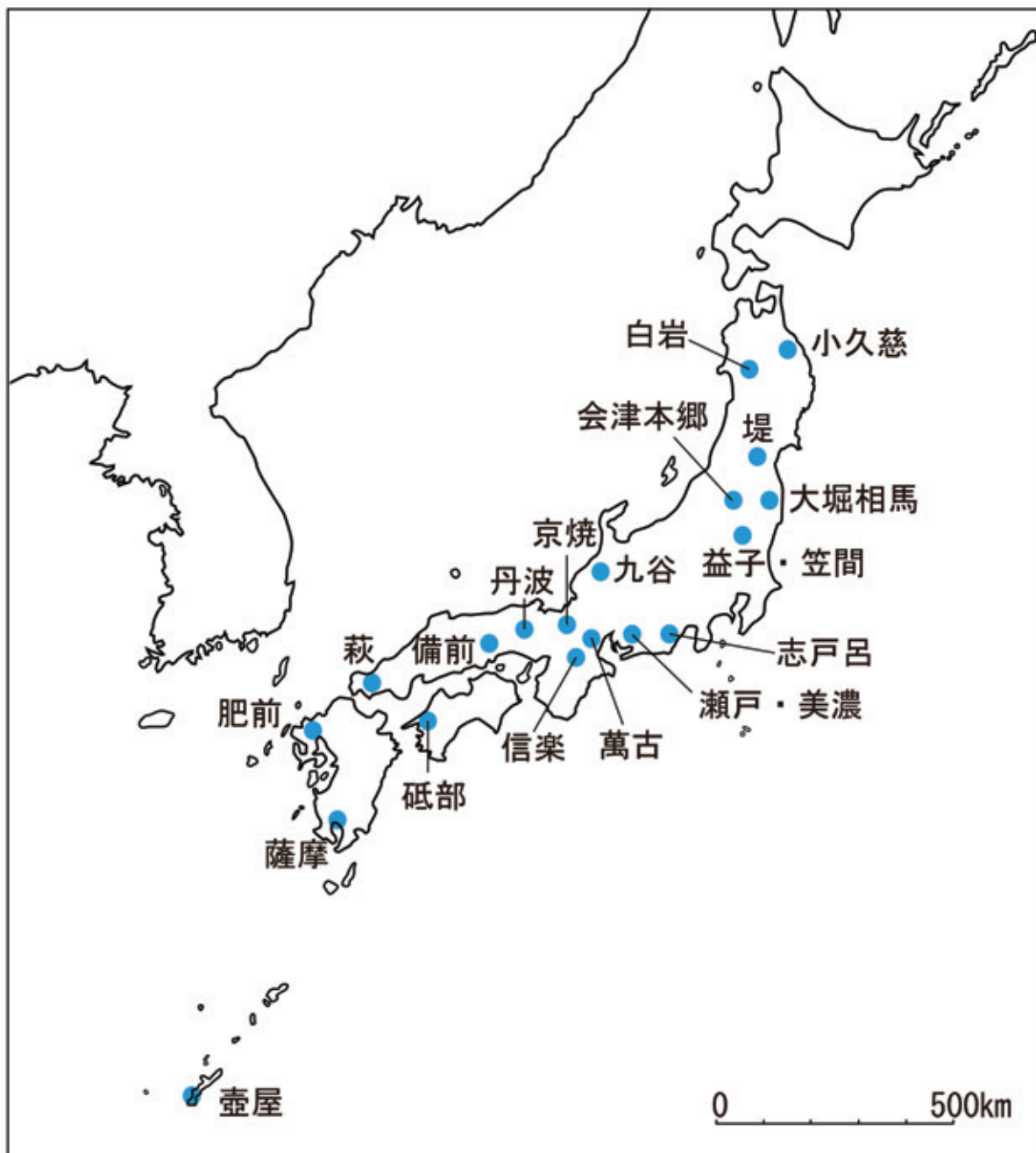
中世における陶磁器（やきもの）は、武士などの権力者が使用する高級品でしたが、中世末から近世初頭にかけて、陶磁器生産にいくつかの技術革新がありました。

15世紀末頃の瀬戸地方（愛知県瀬戸市）や東濃地方（岐阜県南東部）では、焼成窯が大量生産可能な大窯へと代わり、瀬戸美濃製品（瀬戸焼・美濃焼）として、全国へと大量に流通するようになります。その後、16世紀末頃になると、豊臣秀吉による文禄・慶長の役（朝鮮出兵）をきっかけに、北九州でも陶磁器生産が盛んとなり、日本国内で初めて磁器が生産されました。

有田（伊万里）焼などに代表とされる肥前製品は、磁器に染付を施し、大量生産も可能であったため、全国へ急速に流通するようになりました。特に17世紀末から18世紀の陶磁器は、さらなる技術の進歩により、庶民が購入できる価格であったため、全国各地で消費されます。もちろん、全国各地の近世遺跡では、肥前製品が大量に出土する傾向にあります。しかし、19世紀になると瀬戸でも磁器生産が始まり、陶磁器の主流は、「瀬戸物」へと移りました。

東北地方では、18世紀になると大堀相馬焼が流通するようになります。大堀相馬焼は、福島県双葉郡浪江町大堀地区周辺で生産された陶器で、相馬藩の特産物として広域に流通しました。東北・関東地方の近世遺跡では、肥前製品と一緒に出土する傾向にあって、主体とする碗・皿の他、19世紀前半には、土瓶・徳利・鍋類なども多く作られるようになりました。また、藩主相馬氏の献上品としての相馬駒焼（福島県相馬市）などもあり、鉄絵による走り駒の絵が描かれているのを特色とします。しかし、明治時代になると、廃藩置県による相馬藩の解体や、安価な陶磁器の流通により、多くの窯が廃業していきました。

瀬戸美濃製品・肥前製品・大堀相馬焼の流通は、全国各地で強い影響を及ぼし、民窯が派生するきっかけともなりました。19世紀前半には、東北地方の各地でも様々な藩窯・民窯が操業され、各藩の特産物として生産されるようになります。



主な近世陶磁器の産地

白鳥館遺跡第 20 次調査—中世城館の発掘調査—

調査機関：奥州市教育委員会世界遺産登録推進室

調査期間：令和 3 年 6 月 28 日～令和 4 年 3 月 31 日

白鳥館遺跡は、前沢字白鳥館地内に所在し、北上川の屈曲点に半島状に突き出た場所にあります。これまでの調査で、手工業生産を伴う中世の川湊であり、室町時代には城館としても利用されたことが明らかになっています。令和 3 年度からは、史跡整備のため主に中世城館の解明を目的とした調査を実施しています。

令和 3 年度の第 20 次調査は、郭 I 東郭群の虎口（城の出入口）と平場のほか、丘陵東裾の平坦面の遺構分布を確認しました。その結果、郭 I 東郭群では従来、虎口とされていたところは虎口ではなく、丘陵を東西に横断する大きな竖堀跡（写真 1）であることがわかりました。

遺構の年代は、城館最終末期である 15 世紀半ばごろと考えられます。郭 I の南半部にあたるところで城域を大きく区画する竖堀跡が確認されたことから、白鳥館遺跡の城館の主郭は、郭 I ではなく郭 II である可能性がより高まりました。

また郭 I 東郭群の北端部の狭小な平場では、14 世紀前半ごろの墓跡と推定される集石遺構（写真 2）が確認されました。丘陵の北端部は、城館が築かれる以前には墓域として利用されていたことが明らかになりました。

丘陵東裾の平坦面では、2.5 m 以上の洪水堆積土の堆積が確認され、近世以降の北上川の洪水などで平坦面が形成されたことが判明しました。



図 1 白鳥館遺跡縄張図

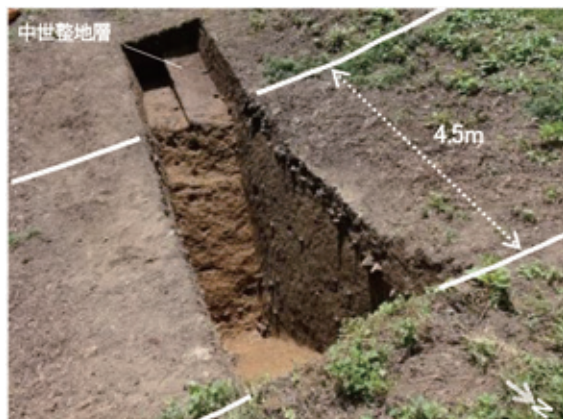


写真 1 竖堀跡

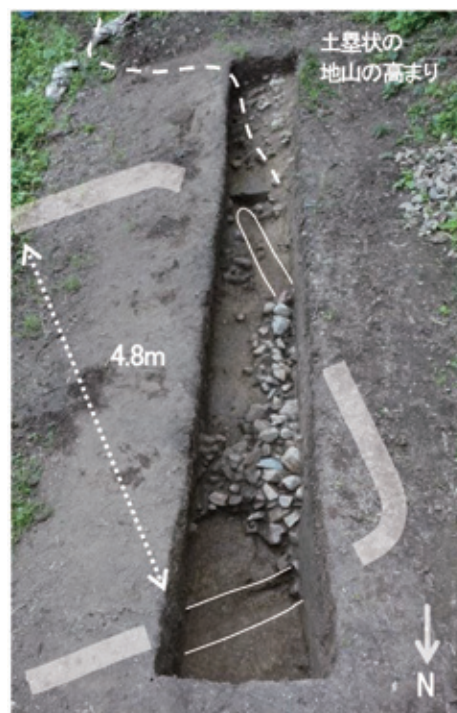


写真 2 集石遺構

長者ヶ原廃寺跡第 19 次発掘調査—北門と西門の再確認—

調 査 機 関：奥州市教育委員会事務局 歴史遺産課

現地調査期間：令和 3 年 7 月 26 日～ 12 月 14 日

長者ヶ原廃寺跡は、衣川田中西地内に位置する 10 世紀末に建立された寺院跡で、約 100 m 四方の築地塀跡によって区画されています。外側には溝跡が巡り、内側の本堂跡と西建物跡、築地塀南辺中央の南門跡の 3 棟の礎石建物跡が遺存しています。

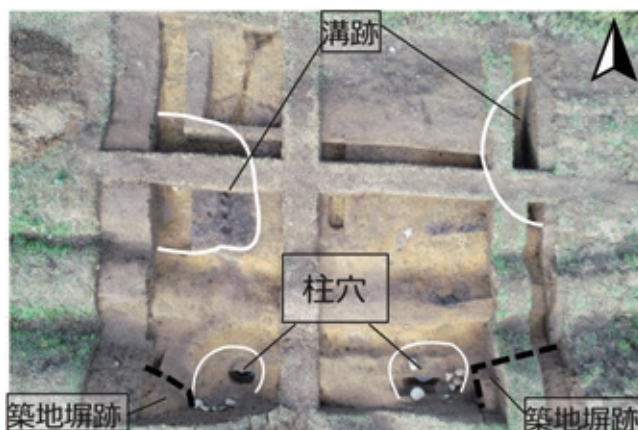
調査の目的は、築地塀北辺と西辺の開口部に門があったかを再確認することです。これまでの調査では、各辺開口部と北辺と西辺の土橋状遺構、南門跡は確認されていましたが、南門以外に門跡は認められていませんでした。

発掘調査の結果、開口部で柱穴を 4 基確認しました。築地塀跡北辺と西辺開口部の築地塀端部に接しており、門柱跡と考えられます。

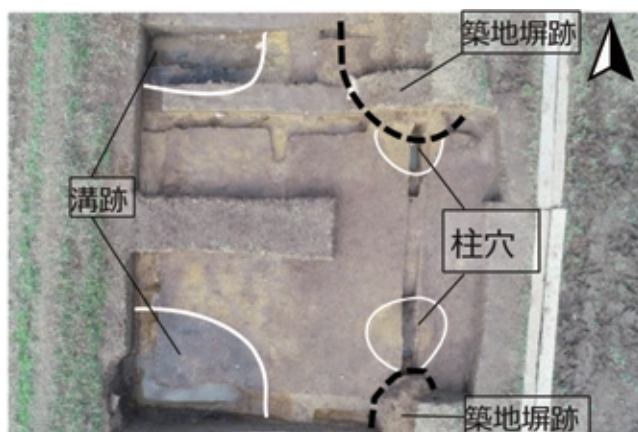
門柱跡の大きさは直径 1 m 程で、2 基の柱穴は北門跡では 3.3 m（11 尺）、西門跡では 3.0 m（10 尺）離れています。北門跡の西側の柱穴内には柱の沈み込みを防ぐための礎板とみられる木材が遺存していました。

門跡は、築地塀開口部、土橋状遺構の位置関係から門は寺院の創建時から設計されていたものであると考えられます。

これまでの調査で開口部周辺には直径 1 m 程の柱穴が他にみつかっていないことから、北門と西門は 2 本の門柱の間に棟を渡し、屋根を持つ棟門か、2 本の門柱の間に木材を渡し屋根を持たない冠木門と推測されます。



北門跡 直上から



西門跡 直上から



長者ヶ原廃寺跡全体と調査位置



柱穴内の礎板と見られる木材

中林下遺跡の調査—平安時代の掘立柱建物群と戦国時代末の居館跡—

調査機関：（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

現地調査期間：令和2年4月7日～11月30日・令和3年4月7日～9月30日

中林下遺跡は、奥州市水沢真城字中林下に所在し、西側に広がる一段高い河岸段丘から流れ下る大深沢川が、その東縁の崖際に形成した小さな扇状地の上に立地しています。

調査期間は足掛け2カ年14か月間で、合計18,520 m²を対象に発掘調査を実施しました。

見つかった遺構・遺物は、主に平安時代（9世紀頃）と戦国時代末（16世紀後半頃）の2つの時期に分けられ、平安時代の掘立柱建物32棟と、戦国時代末の2つの居館に伴う遺構群が確認されています。

平安時代の掘立柱建物は、いずれも一辺40～150 cmの方形柱穴で構成され、建物の規模は15×9 mの大型や、中・小型まで様々です。また重なり合っている建物もあり、建物の長軸方向や分布の様子から、今のところ9世紀代の5時期にわたる移り変わりを考えています。このような掘立柱建物を主体とする特徴は一般集落には見られず、本遺跡は朝廷における公的な性格を持った施設群と考えられます。

戦国時代末の居館跡は、大きな2つの堀に囲まれた北側の居館跡1と、外堀を除く規模・形状がほぼ等しい南側の居館跡2が見つかりました。居館の内部には複数の建物を構成する柱穴が密集して確認されており、池も配置されています。

遺物は、土師器・須恵器、陶磁器の他に木製品や柱材などの建築部材も多く出土しており、当時の様子を生々しく伝えてくれます。



遺跡全景（南から）



平安時代の掘立柱建物群（直上から、上が北）



調査全体図（縮尺不定）



直径40 cmを超える柱根元部分が残る柱穴

明神下遺跡（胆沢） —胆沢川沿いに営まれた平安時代の大集落—

調査機関：（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

現地調査期間：令和2年4月7日～11月30日・令和3年4月7日～7月30日

明神下遺跡は、奥州市胆沢若柳字下堰袋^{しもせきぶくろ}44-1ほかに所在し、胆沢川南岸の河岸段丘上に立地しています。令和2年、3年に19,930㎡を発掘調査し、古墳時代、古代、中世の遺構・遺物が見つかりました。特に、平安時代（9世紀後半～10世紀前半）の竪穴住居跡や鍛冶工房跡を93棟確認し、当時の大規模集落であることが分かりました。

竪穴住居跡や鍛冶工房跡は、調査範囲全体（東西500m）から見つかっており、集落は胆沢川に沿って東西方向に大きく広がっています。竪穴住居跡と鍛冶工房跡はそれぞれエリアが分かれておらず、両者が混在しています。

遺跡からは多くの遺物が出土していますが、特に鉄製品や鉄滓^{てつさい}が多く、集落内で鉄製品の製作や手入れが盛んに行われたものと推測されます。他に灰釉陶器片や愛知県猿投産^{さなげ}の緑釉陶器片^{りよくゆう}が、また石帯8点（巡方3点・丸軋5点）^{せきたい}が出土しています。特に石帯は、古代の官人がもつ装束用帯に付くもので、1つの遺跡から複数点出土することは、県内でも稀な事例です。



竪穴住居跡



鍛冶工房跡（壁際に須恵器大甕が据え付けられている）



明神下遺跡 遺構配置図（任意縮尺）

謝 辞

本展の開催ならびに本書の刊行にあたっては、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターより多大なる御協力を賜りました。

記して心より感謝申し上げます。

参考文献

- (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2013 『下嵐江Ⅰ遺跡・下嵐江Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 608 集
(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019 『町屋敷遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第 693 集
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 317 集
(財) 水沢市埋蔵文化財調査センター 1997 『仙人西遺跡』水沢市埋蔵文化財センター報告書第 8 集
(財) 水沢市埋蔵文化財調査センター 1998 『鹿野遺跡』水沢市埋蔵文化財センター報告書第 11 集
(財) 水沢市埋蔵文化財調査センター 2002 『町屋敷遺跡』水沢市埋蔵文化財センター報告書第 15 集
(財) 水沢市埋蔵文化財調査センター 2003 『下植田遺跡Ⅱ』水沢市埋蔵文化財センター報告書第 17 集
前沢町教育委員会 1999 『町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ 前沢地区』前沢町文化財調査報告書第 8 集
前沢町教育委員会 2000 『町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ 生母地区』前沢町文化財調査報告書第 10 集
前沢町教育委員会 2002 『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書 大室鈴木家墓地調査報告書』前沢町文化財調査報告書第 13 集
北上市埋蔵文化財センター 2018 『奥州街道跡 発掘調査現地説明会』資料
金ヶ崎町 2006 『金ヶ崎町史』1 原始・古代・中世
江刺市 1985 『江刺市史』2 通史篇 近世
水沢市 1981 『水沢市史』3 近世〈上〉
水沢市 1981 『水沢市史』3 近世〈下〉
仙台市 2004 『仙台市史』通史篇 3
奥州市教育委員会 2012 『奥州市の文化財』
えさし郷土文化館 2022 『岩谷堂焼』
仙台郷土研究会 編 2002 『仙台藩歴史事典』
金ヶ崎町中央生涯教育センター 1994 『金ヶ崎の城・館・柵』
竹井英文 2018 『戦国の城の一生』吉川弘文館
本堂寿一 2005 「南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事の作成とその歴史的背景について」北上市立博物館研究報告第 15 号
鈴木透 1992 『前沢歴史散歩』
江戸遺跡研究会 2001 『江戸考古学研究辞典』
大橋康二 2004 『世界をリードした磁器窯』シリーズ遺跡を学ぶ 005、新泉社
平凡社 1990 『岩手県の地名』日本歴史地名体系 3
紫桃正隆 1972 『史料 仙台南内古城・館』第一巻 岩手県南部(旧葛西領北部)
芹沢長介 編 1981 『日本やきもの集成1 北海道 東北 関東』平凡社
高橋充編 2016 『東北近世の胎動』吉川弘文館

発掘された奥州市展 2022

近世の面影 ―仙台藩北辺の要害と屋敷―

主催 奥州市教育委員会
奥州市牛の博物館
一般財団法人奥州市文化振興財団
奥州市埋蔵文化財調査センター
えさし郷土文化館

2022 年 7 月 16 日発行

奥州市教育委員会事務局歴史遺産課

〒023-1192 奥州市江刺大通り 1-8

TEL 0197 (34) 1315

FAX 0197 (35) 7551

E-Mail rekishi@city.oshu.iwate.jp



奥州市教育委員会事務局歴史遺産課

奥州市牛の博物館

一般財団法人奥州市文化振興財団

奥州市埋蔵文化財調査センター

えさし郷土文化館